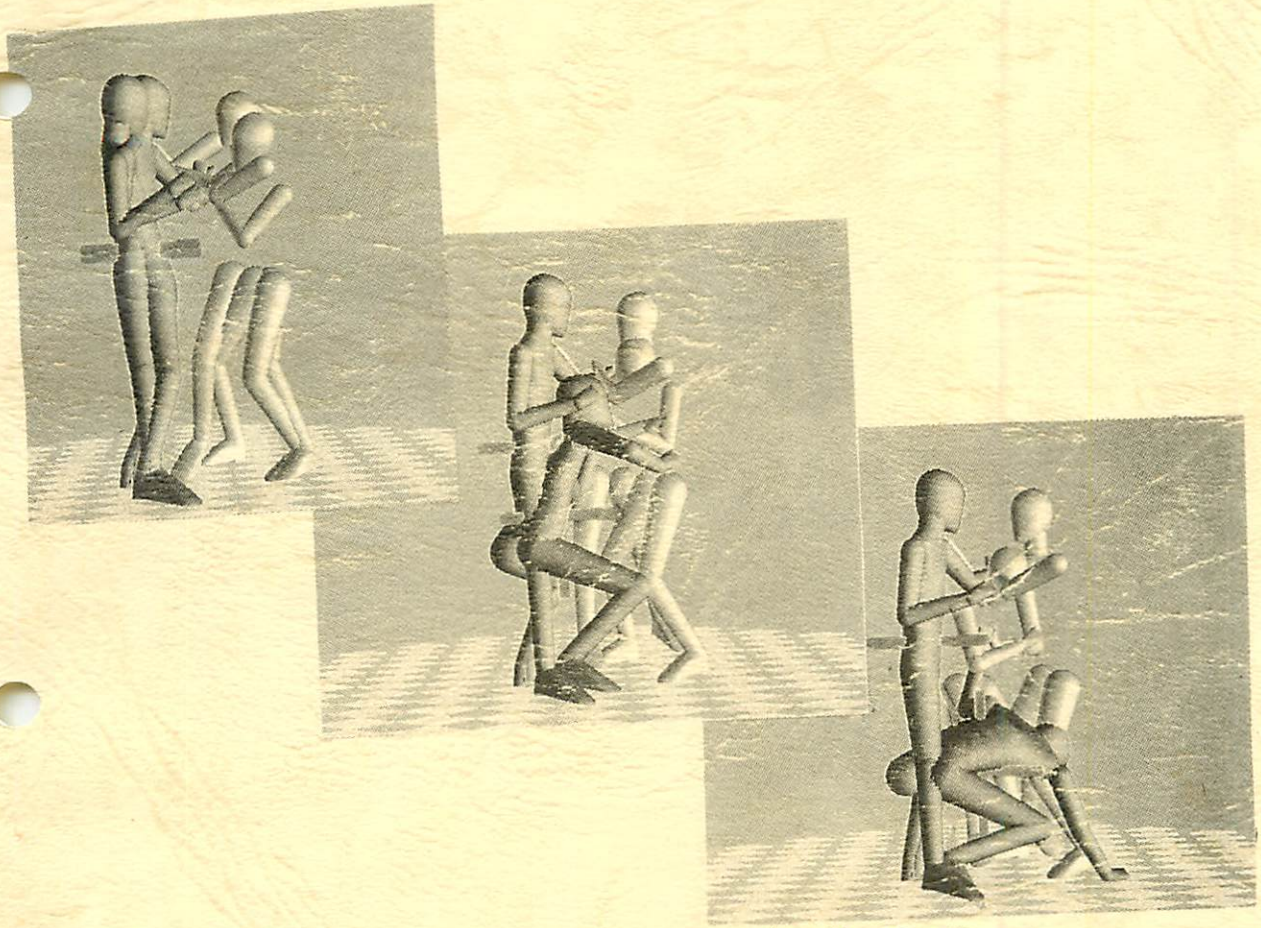
23回
20号 名ボ用

少林寺拳法



１９９２
部誌・ＯＢ会報
第１９号

目次

・挨拶
部長　教授（化学）　菅野　等
監督　一等海尉　相良　達也

・学生寄稿
３８期主将　奇藤　浩
３７期主将　平瀬　慎
ほか

・平成４年度防衛大学校少林寺拳法部
部長・顧問等
第３８期幹部
部員

・平成４年度成果報告

・少林寺拳法部年間計画

奥平会会報

・巻頭言
奥平会会長

・平成４年度奥平会活動概要等

・平成４年度会計報告

・奥平会名簿
名誉会員
正会員

・編集後記

ご挨拶

部長　　菅野　等

合掌

少林寺拳法部のＯＢ諸兄には良い年をお迎えのことと思います。昨年を振り返って見ますと、国の内外ともに多事多難な年でありました。一方、カンボジアにおけるＰＫＯ活動に見られるように、自衛隊のこのような平和維持活動がますます重要になることが広く認識された年でもあったように思われます。

防衛大の少林寺拳法部にとっても昨年は大変な年でした。４月中旬に４年生が下級生に怪我をさせる事件が二件連続しておこり、そのために半年の対外試合への出場自粛という事態に至ってしまいました。 事故そのものは、真面目さゆえの指導の行き過ぎのためにおこったことで、もう少し心の余裕をもって下級生に接すればおきない性質の事故でしたが、ＯＢ諸兄が努力して築いてこられた栄光の歴史に大きな汚点を残すことになり、責任ある立場におりながら未然に防げなかったことを大変申し訳なく思っております。

学生諸君は真剣に練習法について見直しをおこない、改善すべきところは改善するようにしましたので、ＯＢ諸兄に再び恥ずかしい思いをさせるようなことは起きないと信じております。

幸に、秋の全日本学生大会においては団体演舞では最優秀を獲得するなど本来の少林寺拳法部の姿に戻っておりますのでご安心下さい。

本年も暖かいご支援とご指導をいただけるようお願い致します。

結手

監督挨拶

1等海尉　相良　達也

合　掌

奥平会会員の皆様におかれましては、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

本年春に誠に遺憾な事故が生起し、防衛大学校少林寺拳法部の名誉を著しく傷つけましたことを、防衛大学校に在籍しておりますＯＢまた監督として、奥平会会員の皆様に深くお詫びいたします。

しかしながら、その名誉を回復するため、この遺憾な事故に意気消沈することなく、また、それを良き教訓として防衛大学校少林寺拳法部は、日々努力を重ねてまいりました。そして、その成果の現れとして横須賀市民大会（湘南・三浦地区創立２０周年記念大会）、全日本学生大会、全日本自衛隊大会等におきまして大いに活躍し輝かしい成績を収め防衛大学校少林寺拳法部の名誉を回復することに貢献したものと考えております。今後、この成果に慢心することなく、変わらぬ努力を重ね防衛大学校少林寺拳法部の良き伝統を未来に継承するよう学生だけでなくＯＢも一丸となって邁進していく所存でありますので、今後とも宜しく御指導、御鞭撻の程お願い申し上げます。

最後に、奥平会会員皆様の益々の御発展と御健康を心からお祈り申し上げます。

結　手

平成４年１２月記

三十八期主将
奇藤　浩「本年度の抱負」

合掌
この度、防大少林寺拳法部の政権を三十八期が担当することとなりました。故き良き伝統を引き継ぎ、さらに新しいことへの挑戦と、三十八期を先頭に部員一同一丸となって取り組んでいく所存であります。私は「自ら燃えよ　自ら燃えてこそ　真に輝く」を目標としました。日頃の練習では、受動的に練習しているものが多いように思われます。もっと自発的に少林寺拳法の練習を行ない、楽しささえ感じられ、苦しさにも目を輝かせて耐え、立ち向かうような部員、部を作っていこうと日々努力し、下級生共々頑張っております。
最後となりましたが、諸先輩方の今後とも変わらぬ暖かいご支援、ご高配のほどをお願い申し上げ、新政権の挨拶とさせて頂きます。

結手

三十七期主将
平瀬　慎

合掌
白帯を腰に巻き、競技場の土手を走る自分の姿が昨日の事のように思われます。
少林寺拳法部に籍をおき、汗を流していた時期を今振り返り、これを何かに例えるならば、秋の大型台風といったところで、圏内においては、自分の位置を把握するのは難しく、さらに強烈な風雨において攻撃され、吹き返しにより、逆から揺さぶるのであります。この台風に目はなく、気の休まる時期はなかったように思われます。歴史的に残る伊勢湾台風も、フロリダを襲ったアンドリューも、嵐というものの次にあるのは素晴らしく晴れ渡った晴天であります。四年間を乗り切るというのはこのような事ではないかと思うようになりました。
あらゆる苦労、困難も、自分の経験になり且つ成長させてくれる良い材料であります。防大少林寺拳法部は、それらの中の一つのステップであり、人生に起こり得るあらゆる困難に対する準備期間、心構えの時期とも云えると思います。後輩の諸君、思いっきりクラブにぶつかり、自らの晴天をつかんで下さい。
最後に、御世話になった師範、監督、顧問の皆様、有り難うございました。同期の皆、永い友達でいよう。

結手

三十七期支部長
高取　哲郎

合掌
月日の経つのは早いもので、卒業まであと僅かとなった今、四年間を振り返り思い出されるのは、共に汗を流し、修行に耐え、喜び、悲しみを分かち合ったときの同期の皆、諸先輩方、そして今も練習に励む後輩達の顔でしょうか。短くて長かったこの年月は、これからの私の人生にとって貴重な糧となるに違いありません。
三十八期以下後輩諸君、君達の元気な姿を見ていて大変嬉しく思います。君達の生き生きとした気合いは、我々三十七期の励みであり、誇りでもあります。この先、辛くきついこともあるでしょうが、今の君達に不可能なことはありません。自分を信じて、先輩を信じて、頑張って乗り越えていって下さい。君達の勝利を祈り、いつまでも応援しています。
なお部長、顧問を初めとするＯＢ各位におかれましては、未熟な私に対し、これまで多大な御支援御指導のほどを承り、心よりお礼申し上げます。
最後に、三十七期の皆、四年間本当に有り難う。防衛大少林寺拳法部万歳！
結手

三十八期副将
向井　洋史

合掌
三十七期の政権も終わり、新たに我々三十八期が政権をとる様になってから早二ヶ月がすぎました。三十八期は十四人という少数の期です。しかし、だからこそ「少数精鋭」というスローガンを掲げ日々精進してきました。その成果は去る十一月に行なわれました全日本学生大会において証明されたと自負しております。団演期間のあの厳しい練習は、大会において良い成績を残すためだけではなく、政権をとる前の「登竜門」としてもおおいに意味のあったものだといまさらながらに改めて諸先輩方に感謝しております。また、後輩達にもこの気持ちを思いきり伝えていきたいと思っております。
さて私は、この新政権において、乱捕兼演武副将という大役を引き受けているわけですが、肩章をつけるからには他の者に恥じぬよう自分自身に厳しくしていきたいと思います。勿論同じように、いやそれ以上の厳しさをもって後輩指導に力を注ぎたいと思います。
また、演武だけでなく、乱捕も積極的に行ない、少林寺拳法の技をいかにして実戦に活かすかを研究し、指導していくつもりです。
三十八期十四名は、これからも一丸となり、この防大少林寺拳法部の伝統を守るべく努力して参りますので、今後もご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。
結手

３７期

岩本　正行「少林寺拳法について思うこと」

私は防大に入校する前、極真会をやっていたためか他の武道に対して変な先入観つまりチャンチャラおかしくてやってられないといった気持ちがありました。したがって同小隊の者に誘われたりして空手部、少林寺拳法部などの各武道系クラブ見学をしてみたが、いっこうにしっくりくるものがありませんでした。しかし防大に存在するクラブで一番極真会に近いものは少林寺拳法部であると考え、同部に入部しました。入部後気づいたことですが、極真会と少林寺拳法は私の考えとは裏腹に、ほど遠いものがありました。第一に考え方、思想が違っていたのです。月日、年を経るごとに先に述べた先入観は私の頭から遠ざかっていったような気がします。

よく少林寺拳法の技は実戦では使えないとか耳にしますが、それは大きな間違いであるように思えてきたのです。というのも、少林寺拳法をやっている人で決して弱い人はいませんし、仮に肉体的に弱くとも精神的に強い人を実際にこの目でみているからです。要するにそういう人たちはその道に徹しているからであると思います。どんな武道にせよ、その道のエキスパートになればそれに勝るものはありません。現在私はもう引退しているが、そのようなことから、防大少林寺拳法部に所属している間は少林寺拳法に徹してほしいと思います。そして引退してからは、自分の好きな、良いと思う方向に進めばいいと考えます。よって、現在のクラブの後輩達に「その道のエキスパートになれ！」という言葉を申し送りたいと思います。

大山　剛「防大少林寺拳法部回顧録」

私が期待と不安を胸に防大少林寺拳法部に入部したのは３年前の５月だった。きついクラブであると聞いていたが、それが誇張されたものではないことを知るのに時間はかからなかった。毎日がクラブ中心にまわった。午後の授業ではクラブに備えて睡眠をとり、クラブの疲れで自習時間を棒に振ることもしばしばあった。しかし、クラブをやめたいと思ったことは一度もなかった。どんなにきつくても、自分で選んだ道を否定したくなかった。こんな自分の負けず嫌いな性格が功を奏して、政権をとる頃には体力も精神力も人並以上についていた。

人間はとても弱い生き物である。クラブを続ける中でそれを強く感じた。しかしまた、クラブを続けることによって、自分の弱さを少なからず克服することができたように思う。

想えばこの三年半、苦しいこと、楽しいこと、様々なことがあったが、この自分の選んだ道が最高のものであったと信じている。

最後に、クラブを通じて多くの有意義な時間を与えてくれた仲間に感謝する。

石原　寿英

防大少林寺拳法部に在籍すること三年半、振り返ってみると得たもの、失ったものそれぞれあるが、今となっては良き想い出として残っている。我々は、関東学生大会・全日本学生大会等の制覇をめざし日夜苦しい修行を積んできたが、真の目的はそれらの練習を通して克己心の強い人間を創ることにあり、大会のタイトルやメダルはその副賞にすぎなかったように思われる。克己心の欠けた人間に、競争または勝負の世界において何を要求することができるだろう。下級生の諸君は、まだ練習で上級生にやらされていると思うことが度々あるだろうが、障害に立ち向かうという前向きの考え方をもってこれからの練習に励んでもらいたい。

木下　治信

私は、防大の四年間を少林寺拳法部を中心に過ごしてきた。苦しかった夏合宿や、団体演武も今では、生涯最高の思い出となっている。

入部したときは「しまった」とも思ったが、最後までやり通して、自分に一つの「区切り」をつけられたことは、男として、防大生として非常に大切なことだったと思っている。また、続けてきたことによって培われたものは、なにものにも変え難いと思う。今後は、防大少林寺拳法部で手にいれ、身につけたものを基として、より高い自己を確立していきたいと思う。

後輩のみんなも、元気を出して最後まで続け、防大少林寺拳法部の伝統と発展を築いていってもらいたいと思う。

久重路　剛「想い出」

今振り返ってみると、この防大四年間、様々な出来事があり、色々な想い出が生まれた。

あの日はつらかった。あの日はきつかった。あの時は死にそうであった。そういえばあの時は既に死んでいた。思い返せば、少林寺拳法部での四年間は、まさにハードではなかっただろうか。ついつい苦しいときの想い出ばかりが頭に浮かぶが、しかしながら、その苦労の後には常に（？）楽しい日々、輝きある成績があった。そして想い出以上に素晴らしい友人を多数得た。

このように青春のひとときに、想い出・友人を得られ、この防大、そして防大少林寺拳法部に感謝したい。どうも、ありがとう。

兒玉　洋「無題」

「やっと終わった・・・」これが現在私の持つ偽らざる心境である。二年と半年もの間校友会活動を続けてこられたということは、中学・高校とノンポリで過ごしてきた私としては驚異というほかない。思えば三年半前、ある上級生に「少林寺拳法部にはいれ」といわれたのが長い夢の始まりであった。それが吉夢か悪夢かはあえて言わないが・・。少林寺拳法部員の肩書きを背負ってから、私は血と汗と涙をしぼり尽くした。その代償として得たものは、長い人生の中で峻烈にかがやくであろう思い出と、今までの人生では得ることのできなかった大いなる自信、同期の団結、そしてともに苦しみ、喜びをわかちあった友人たちである。少林寺拳法部は、私の人生において、巨大な節目となった。ここで得られたことは、これからの人生において大きな影響を及ぼし、私はそれがよい影響であることを疑わない。

鈴木　隆弘「防大少林寺を通じ私が考えること」

私がこの防大少林寺で学んだものは数知れない。一年から政権をとるまでの間、節目を作って自分を振り返ってみても、確かな成長を見たと思う。政権をとって実際に人を教え成長させるという教育の立場にたつと人間としてのあるべき姿とか、上に立つ者としての在り方について考えるようになり、今思えば自分が一番大きく成長したのはこの時だと思う。二年係としての私の指導は世の中で通用するものではない。しかし、私が教えた二学年だけでなく防大生は将来多くの人間を動かす人材となるわけである。その人間が幅広い考えを持った人間でなければ人を教育し率いることはできない。（それだけではないが・・・）
防大少林寺は、極限状態を知り、人を信頼し信頼される方法を知る、学生舎生活では失われたものを数多く持つ最高のクラブであると私は信じる。

冨原　大治「聖句」

私は個人的に「聖句」が好きである。何故と言われても、ただなんとなくではあるが、とにかくとても良い言葉であると思う。
私は聖句の内容について以下のように解している。己こそ己の寄るべ、とあるが、これは自分にとって一番頼れる人間は自分であるから自分をもっと頼もしい人間にしようということで、自ら悪をなさば自ら汚れ、とあるのは、自分が悪ければ反省すべきことがある、裏を返せば悪いことがあれば、人の所為ではなく反省すべき点は自分にあるということではないでしょうか。
困難に出会ったときはすぐ他人をあてにするのではなく、まず自分が何をすべきか、または自分に何ができるのかを考えてみるべきではないかと思います。

中居　景

少林寺拳法は苦行ではない。
私が入部する際、周囲から反対されまくったが、本質をこのように理解していたので、すぐに入部を決めた。しかし、実際は常に苦しみ、時間が早く過ぎ去っていくことを願い続けた毎日だったと思う。それでも、二度と経験することはできないであろうこの苦しみが私にとって大きな自信となり、非常に感謝している。
今思うのは、「本当に少林寺拳法をやったのであろうか」ということである。確かに団演で優勝できた。乱捕も自分なりにうまくなったと思う。だが、実際に少林寺拳法を応用して乱捕できるかというと自信がない。私は今まで何をしてきたのだろうと考える。ＯＢの話を聞くと、少林寺拳法が全ての面で発揮された強さが伝わってくる。何故自分なりのやり方で少林寺拳法が使えないのか。結局間合い、運歩、基本の突き蹴り、いずれも身についていないのである。ボクシングに対してその間合いで対戦しても勝てるわけがない。それに加えて、少林寺拳法の特徴を生かせない練習法も大きな原因である。こんな乱捕の方法で「少林寺は使えない」と言うのは愚の骨頂である。
四年間非常に貴重な体験をした。しかし私自身の技は付け焼き刃にすぎない。これから機会を見つけて本物にしていきたいと思っている。全ては基本である。
最後に、全自衛隊大会の銅メダルが一番価値があったと思えることを伝え、兒玉に感謝して結びとする。

古田　和之「四年間を振り返って」

引退した今、クラブを振り返って思うときに感じることができる満足感は、いくら金を払っても得ることのできぬ私の唯一の至高体験の結晶であると思う。
一学年時の合宿、二学年時の黒帯自覚週間、三学年時の二つの団演のどの想い出をとってもこの限られた紙面では言い表わせないものである。決して初めから好きで入ったクラブではなかったが、日が経つにつれ、限りない愛着感、クラブの同期生という一体感が、クラブに対する思いを変えたと思う。
最後になるが、三十八期は政権後も自分に厳しく下級生指導に全力を尽くしてくれ。二年、一年は、とにかく途中で志し半ばにすることなく四年の秋まで精一杯頑張れ！
「倒れた後、止む」
この言葉を実戦するのは、お前らだけだ、と信じる。

森安　宏徳「四年間を振り返って」

一年の四月に二年、三年の勧誘を受けて、他の上級生の「考え直せ」という警告を無視して少林寺に入部した。それから四年間、色々なことを経験した。他の者が遊んでいる授業後や、休日に何故こんなことをしているのだろうと頭の片隅で考えながらしばかれていた。十六時が近づいてくると胃がキリキリ痛んだ。
しかし振り返ってみると得たものは大きかったと思うし、やはり良かった。

山下　豊

少林寺拳法部について何か書いてくれと言われて、少々困っている。こういった面倒なことはごめんこうむりたいと、ずいぶん長い間書くのを渋っていたのであるが、先日風呂場にて宮下に催促されて、政権を交代した３学年にとって、４学年は扱いにくいものなのであろうと感じられ、４年の我が儘でいつも下級生は苦労するものだと思い、しかたなく机に向かってみた。思えば私も偉そうになったものである・・・・・反省。

さて、何を書こうか？この際、日頃思っていたことをぶちまけてしまおうと思う。

私は、少林寺拳法において、本格的な乱捕の大会がないことが不満である。と言うよりはむしろ、我が部における方針が、演武偏重であることに不満である。「力なき正義は無力なり、正義なき力は暴力なり」、この言葉にひかれて、強くなりたいと願い入部したのに、自分はそうなれたであろうか、あるいはそうなれるであろうか・・・こんな悩みをもつ者は少なくないのではないだろうか。本来、演武は乱捕、あるいは実戦のための練習法であると言える。演武の練習によって培われるのは、急所を的確に攻めるための正確な突き・蹴り・体さばき、あるいは無駄のない動きをするためのきれいな突き・蹴り・体さばきであると思うが、いざ戦うときに必要なことは、当然それだけではない。攻撃の時機、思い切りの良さ、気迫、微妙な駆け引き、瞬間的な判断力等様々な要素が必要であると考えられる。そして、これらは、乱捕を通して培われるものであろう。さて、演武、乱捕で培われる要素をそれぞれ考えてみて、いざ戦うときには、どちらが重要だろう。まちがいなく後者である。思い当たることはないだろうか。早慶防定期戦はどうであったか。私は、１、２年の時こんなものかと思った。そして３年の時乱捕の慣れが足りないことを痛感した。

これからの少林寺拳法部を担う３８期を初めとする後輩達へ・・・伝統を守ることも確かに大切ではあろうが、もっと戦いの場で強くなって下さい。くれぐれも強くなりたいと願い入部してくる後輩を幻滅させることのないように・・・。これからの健闘を期待しています。

矢坂　勝良「四年間のクラブ生活から」

私が少林寺拳法部に入部したとき、約三十名の同期がいたが、政権をとったときには十八名となり、約三分の一がクラブをやめていました。私も何度か、やめたいと思いましたが、結局続けて良かったと感じることができます。本当に防大少林寺はきつくてつらいと思いますが、でもそういう苦しさを分かちあえた同期が沢山できます。こういうことは、戦争でも起きない限り、これが最後だと思います。そこだけを考えても良いクラブだと思うのです。

それに頑張れば、全日本で優勝というオマケまでついてくる。俺達もそのオマケを手にいれた。後輩達も手にいれることを願っている。

吉田　文二「四年間を振り返って」

我々三十七期も、今ではＯＢとなり、今までの自分を振り返る時間が持てるようになりました。今にして思えば、確かに楽な道のりではなかった。終わってみればいい思い出であったと思う。三十八期諸君は、政権担当者の立場を自覚しつつ、部の向上を一つの目標として、運営していってほしい。三十九期以下の部員は、一時の苦しさに負けることなく、目標とすることを見失わずに頑張ってほしい。

弱体化する防大校友会、防大自体に負けることなく、少林寺拳法部の伝統を守っていってほしい。なんだかんだといっても、最後にものをいうのは、根性であることを忘れないでほしい。

３８期
尼子　将之

「なに！ヨット部クルーザー！そんなナンパなクラブは許さない。」「おまえには、少林寺拳法部がいいんじゃないか。」
そう部屋長に言われて、また「初心者でも日本一になれる」という言葉に惑わされてクラブ見学に行った夜、私の机の上には、新しい道着と卍がありました。
あれから三年が経ち、卍は緑から黒にかわり、政権をとるようになりました。こうして筆を執っていると、様々なことが思い出されます。つらく厳しく、また失うものも多かったのですが、それ以上に、得たものが数多くあります。それは、いろいろな人と出会えたことです。一つの出会いが人生を大きく変えてしまうことがあります。私の場合は、そこまではいきませんが、素晴らしい人達に出会えたと思っています。後残りの時間、先輩方が築いてこられた伝統を、後輩達に受け継いでいくと共に、よく学び、自分自身少しでも成長できたらと思い筆をおくことにします。

城戸　利彰「所感」

最近私にとって重大な出来事が二つあった。まず一つ目は、全日本学生大会において団体演武で優勝した事である。三十八期は動ける人数が十二人しかおらず、いつも綱渡りの状態であった。またなかなか練習の成果が現われず、そのため四年生から「絶対に勝てない」と言われ、自分も「勝てない」と思っていた。しかし、大会三日前の壮行会で自信をつけた私たちは、本番もあまり緊張せず自分達の力を十分に発揮できた。その結果優勝する事ができ、それまでの練習の苦しさが思い出されて、嬉しさと安心感で目に涙があふれた。自分自身でも本当に良くやったと思う。
二つ目は、私たちが政権をとったということである。政権をとってはじめて、人に教えることの難しさを知り、政権の重みというものを知らされた。三十八期政権を良くするも悪くするも私たちの責任であることを忘れず、精進していきたい。

黒子　智彰「少林寺拳法に出逢ってから」

私と少林寺拳法の出会いは、防大の着校時にさかのぼる。着校したとき、部屋長の方が人間的にも素晴らしく、また同じ中隊の４年生でバリバリの方がおられて、さぞかし厳しい部にはいられているのだろうと思った。すると案の定、その方は少林寺拳法部の主将、そして部屋長も少林寺拳法部だった。
防大少林寺拳法部は日本一だと聞いたので、短絡的な私は、私も日本一になれたらいいなぁという夢を描き、また同小隊の１学年で私のほかに４人入部するという事で私も少林寺拳法部に入部した。
私は一浪していて運動不足のため、練習はとてもきつかった。入部して２週間ほどで体重が１１ｋｇも減った。毎日々々が部活の為にあるようなものだった。何度もいやだなと思った。しかし、やめたいと思った事は一度もなかった。
団演期間も勿論の事きつかったが、力を合わせて頑張った。「日本一」という栄光をつかんだ。少林寺拳法部に入って本当に良かったと思った。これからもしっかり頑張ろうと思う。

佐藤　滝大「政権をとって」

我々三十八期が入部して早くも二年半となる。顧みれば、長いような短いような複雑な気分である。
思えば我々が入部したときは三十五期の諸先輩が政権をとっておられ、我々は先輩方の強さに憧れ、少林寺拳法部に入部したのであった。そして厳しい練習の日々が過ぎ、政権も三十六期、三十七期と交代し、現在は我々三十八期が政権をとっている。
今にして思えば諸先輩は我々後輩のことを第一に考えて下さっていたことが良く分かる。日々の練習の度に諸先輩の労苦が偲ばれる。
我々が直接接することのできた三十五期、三十六期、三十七期の諸先輩は強く、厳しく、そして優しい素晴らしい人たちであった。我々もそうあらねばならないと思う。諸先輩が我々にとってそうであったように、後輩にとって我々は、良き指導者でなくてはならない。そうなれるように、日々努力していきたい。

高岡　徳人

三十八期も十一月に、念願の日本一になることができました。ここまでの過程を思い出すと、きついことしか頭に浮かびません。十二人団演をするに当たって、夏合宿のあたりから結構もめました。十二人ギリギリでするか、余裕をもって八人でするか。結局、勝つために十二人ですることに決定しました。正直言って、冒険でした。今まで、団演でけが人がでないことはなかったらしく、実際、三十八期も、大会直前までけが人が結構いました。伸び悩んだ時期もあり、日本一になれるかどうか不安でした。各大学のレベルがせまってきていたことも不安材料の一つでした。その中でとれた日本一だったので、喜びもひとしおです。
政権を引き継いで、私は三年係になった訳ですが、三十九期には是非、関東、全日本をとってもらいたい。そのため、私も毎日の練習に力をいれて、少しでも高いレベルになってくれるよう頑張っていきたいと思います。

高橋　俊隆「新政権における抱負」

三十八期が政権を引き継ぎ、すでに数週間が過ぎようとしていますが、実際に指導を行なう立場になり、また主務という役職上、特に経営面のことにかかわり、改めて、先輩方がいかに多くの苦労をされながら少林寺拳法部を引っ張って来られたのかを実感している次第であります。
私は入部してからの三年間、けがが多く練度的にも同期の皆よりも多少劣ってはいますが、今回主務という役職につけていただき、「部の運営」という方面から伝統の継承、そして発展に全力を尽くして、部に貢献していきたいと思っています。至らないことも多々あるとは思いますが、今後とも変わらぬ御支援の程宜しくお願い申し上げます。

達下　裕教「政権まで」

「光陰矢の如し」と言いますが、まさにその通りで、入部当初のことが今も鮮明に甦ってきます。
入部したばかりで、まだ何も知らなかった私は、自己紹介の際、先輩方にこう言ったことを覚えています。「先輩方の築かれてきた伝統を受け継げるよう全力で頑張ります。」そして、後で「とんでもねぇこと言っちまったなぁ・・・」と思ったことも覚えています。
団演の練習が始まると、同期の少なさに、技の伸び悩みに、何度「ダメだ」と思ったことか。それだけに団演を勝ち取ったときの喜びはひとしおでした。これら数々の忘れ得ぬ思い出は、一生涯、心の宝として残るものでしょう。
この度、三十七期の先輩方から政権を譲り受け、防大少林寺拳法部の更なる躍進、伝統の継承のために、今後とも、微力ながら、全力を尽くしてゆく所存です。

中村　格

我々、三十八期が先輩がたより政権を譲り受け、まもなく一か月が過ぎようとしており、今では、後輩への指導のあり方に頭を悩ませております。
今から二年半前には、武道の経験などなく、体力も人並以下であったことを思えば、時の流れの早さを痛切に感じ、また三十五・三十六・三十七期の先輩方のご指導にただ感謝を覚えるばかりです。
さて今まで、最初は黒帯を、ついでは団体演武優勝を目標として指導をうけ努力してきました。そして指導を行なう立場になってみると、今さらながらに自分の未熟さが見えてきました。そこで生涯一学生であるということを念頭において、指導する立場であるとともに、皆と一緒になって自身を向上させていこうと思っています。以前よりもより難しいことであるとは思いますが、輝かしい防衛大学校少林寺拳法部の伝統を継承、発展させ、またそれができる地盤を築くことに全力を尽くしていきたいと思います。

長濱　誠「予備のいなかった団体演武」

平成四年十一月一日、私たちは日本武道館にいました。
思えば夏合宿四日目の夜、これから始まる団演についてのミーティングを行なっていました。私たち三十八期は十四名しかおらず、しかもそのとき動けたのは十二名だけでした。
「八人団演にするか、それとも予備無しで十二人団演でいくか・・・」関東学生大会に参加していなかった私たちは、どちらを選んだとしてもその道は厳しいものでした。私たちは、全員の意見により、十二人団演・予備無しでいくことに決めたのでした。
本選を終え、結果が出たとき、私たちは涙を抑えることができませんでした。大きなプレッシャーを乗り越え、私たち三十八期は、ますます団結を堅固なものとし、我が部を引っ張っていこうと思います。三十七期の皆様、どうも有り難うございました。

平井　穣治

無冠であった我々三十八期でしたが、全日本学生大会において最優秀となり、無事政権を譲り受けることができました。これによって、今までのように先輩の言葉を信じてついていけばよい受け身の立場から、先頭に立ち皆を引っ張っていかなければならなくなった訳です。
しかしながら実際に指導するとなると、非常に頭を使うものであります。特に我々三十八期は人数も少なく、各人の担う責任も重く、また、部長、監督、諸先輩に、今までの良い伝統を崩すこと無く、すべての面においてイメージを一新するよう求められています。この状況を打開するために、談を密に行ない、「少林寺拳法部ここにあり」という信念を消すこと無く、新しい活動を目指したいと思っています。
統制長という、幹部と各係のパイプ役となる重大な任に就くにあたり、何かと至らない点もあるかと思いますが、機会在るごとに御指導のほどお願いいたします。

水野　亮二「三学年としての抱負」

防衛大学校少林寺拳法部に入部して以来、三年間が過ぎ去り、我々三十八期が政権をとることになりました。
教えられる立場から、教える立場へと変化した今、「一学年の頃、四学年の方々の手を煩わせていた我々が、あの素晴らしい指導を引き継いでいけるだろうか」という不安が無きにしも在らず、というのが現在の偽らざる心境であります。
道場で一生懸命練習している一、二学年の指導をしていると、自ら学ぶことも数多くあります。
これからの一年間、後輩と共に三十七期の先輩方から受け継いだ防衛大学校少林寺拳法部の輝かしい伝統をさらに発展させるべく、日々の練習を大切にして、精進していきたいと考える次第であります。今後とも、部長、顧問、ＯＢの方々の暖かい御指導を、宜しくお願い申し上げます。

宮下　克聡「指導する側となって」

我々三十八期は、先輩方の指導のもと少林寺拳法を学び、練習し現在に至ります。
入部の動機はそれぞれ違うにしても、その根本にある「自分を試してみたい」という気持ちは変わらないものと思います。二年半経って、三十七期の方々から政権を譲り受け、人を指導する立場となった今でも、私にとって少林寺拳法部の活動は「日々是挑戦」です。
ただ、今までとは違い、自分の技をどう磨くか、というのではなく、他人をどれだけ上達させられるか、ということに対しての挑戦です。自分の体でさえ、思う通りに動かすのは難しいのに、ましてや自分の体ではないのですから、毎日が試行錯誤の連続です。けれども私たちが、先輩方から教えて頂いたこと、自分でどうにか体得したコツなどは、余すところなく後輩に教えていく必要があり、それはまた義務であるとも思います。
私たちは、少林寺拳法の教えとともに、防大少林寺拳法部としての伝統と誇りを後輩に伝えるべく、今後一層の努力をしていくつもりです。

３９期　　「今まで得たもの、これから得るもの」

井上　嘉史

少林寺拳法の修行は一人では行なうことができない。例え単演であったとしても、その向上を期するならば、師範が、先輩が、同期が、そばで見ていて注意を促してくれる誰かが必要なのである。そのことを、「単に強くなるため」に入門した私は、日々の鍛錬で思い知らされた。そこから、日々の生活でも周りの人々に支えられて生きている自分の姿が徐々に見えるようになってきた。少林寺を通してまさに「同志相親しみ、相助け、相譲り」の精神にふれることができたのは大きな収穫であったと思う。

これからは、助け合いの精神を実行するために必要な真の寄るべとなる自己を確立していきたい。いかに自分が社会に貢献できるかを考えたとき、充実した自己が必要とされる。真の寄るべとなる自己確立のために、今後一層の努力を重ねようと思う。努力の中で、新たに得ることがあるだろう。

井上　裕策

私が防大で少林寺拳法をはじめようと考えたのは、強くなれること、他の武道にはみられない「剛柔一体」の特徴を持っていたことを知ったのがきっかけだ。

実際に入門してみると、開祖の教えも重視され、わずかではあるが人生観も変わったように思える。防大少林寺において、自分に打ち克つ精神、同期の団結心を得られたことは大きな収穫である。自分に限って言えば、よく一武道の段位持ちになれたものだと思う。振り返って思うのは、一見簡単そうでその実なかなか難しいということである。若いうちにやれるだけやっておいたことは人生の財産と言われるように、初めは余り好きになれなかった少林寺も私にとって宝ではないのだろうか。

この次は、三学年としての団体演武という目標がひかえている。技量はまだまだであるが、筋力と技のスピードをつけることに力を入れようと思っている。少林寺拳法を始めて一年半が経ったが、これからも部の発展のために自分の役割を果たしていきたい。

遠藤　英隆

何か素手でやる格闘技を身につけたかった。突き・蹴り・投げ・固め・関節技という全ての要素を備えている少林寺拳法を選んだ。一年の前期、正直なところ失敗したと思った。でも途中でやめたところで敗北感しか残らないことは自明の理だった。一年間続けてみようと思った。中期。全自衛隊大会で最優秀賞をとった。素直に喜べた。大松学生にも感謝した。人に素直に感謝できる自分に気付いた。後期。相変わらず、練習はきつかった。しかし、確かに強くなっていることに気がついた。

二年になった。黒帯自覚期間は苦しかったが耐えられた。また全自衛隊大会に出場できた。使う技も高度になった。突き蹴りのスピードが出せるようになった。試合では技を失敗してしまい、 0.5点差で優勝を逃してしまった。悔しかった。自分の甘さに気付いた。

今までで重要なことは、いつも自分の能力の限界を伸ばしつつ練習してきたことだ。今までに得たものは、自分を伸ばすための方法とその哲学だった。

大松　清生

少林寺拳法をはじめて、約一年半くらい経った訳でありますが、今になって基本というものの大切さが身にしみて分かるようになりました。基本が出来ていないと、技自体に直接影響してきます。その結果、演武の正確さや風格が損なわれるのです。そこで、私は今後の抱負として、基本の見直しをあげたいと思います。とにかく基本からみっちりとやりなおして、完全に自分のものにし、これから先行なわれる関東学生大会、全日本学生大会の団体演武で最優秀賞を取りたいと思います。私の場合は、基本云々という前に自分の癖を矯正していきたいのです。その上で基本をマスターして、技の習得や演武につなげたいと思います。以上を私の今後の抱負といたします。

小澤　謙雄

防大少林寺拳法部に入部して知らぬ間に一年と半年が過ぎ、少しはいっぱしの拳士らしくなったかと自分では思っています。

中学校、高校と文化部に所属していて、武道らしい武道をやったことのない私を上級生が熱心かつ丁寧に指導して下さったおかげで、それなりに強い精神力、体力を得ることが出来たのではないかと思います。しかし、私はそのことよりも大事なものを得ることが出来たと断言できます。それは、いつも一緒に厳しい練習を乗り越えてきた同期の絆です。お互いに励まし合ったり、逆に怒鳴り合ったりできたのも同期間の信頼関係があったからだと思います。先日の全自衛隊大会の団体演武の練習を通して同期間の気配り、信用は不可欠なものである、と思い知ることが出来ました。

これからも、二学年の同期間の絆をもっと強くし、先輩方に恥ずかしくない、強い少林寺拳士、少林寺拳法部を作っていくことが私たちの課題であると思います。

朽木　誠

私が少林寺拳法部に入部して、はやくも一年半が経ちました。少林寺拳法は肉体的にはもちろんのこと、精神的にも他の人々と切磋琢磨して、お互いに上達していくという風に、両面を鍛えていく武道です。また、少林寺拳法の教えは、自己を修行によって確立することから始まり、さらに自信と勇気・行動力・慈悲心・正義感を植え付け、個人が幸福で安心して人生を送ることができ、平和な社会実現のための真のリーダーを作るというすばらしいものです。

私が少林寺拳法部に入部した理由は、「強くなりたいため」でした。初めは上がらなかった廻蹴りもかなり上がるようになりました。が、技術的にはまだまだです。ですから、いずれはしっかりと人に教えられるよう練習していきたいと思います。

久保　敦

私は防大に入校してから少林寺拳法を始めた。それから約一年六ヶ月たった今、何を得ることができたか考えてみると、まず第一に精神的強さを身につけることができたと思う。私は何をやっても長続きせず、きついことからはすぐに逃げ出してしまう人間だったのだが、少林寺拳法部に入部してからは少しずつ変わることができた。自分だけじゃ無い、同期もきついんだ。そう思った。お互いに助け合わないと乗り越えられない時期も幾度か経験した。少林寺拳法の練習を通して、全くの他人だった奴が今では良き同期であり、かけがえの無い仲間となった。このようなところが防大少林寺拳法部のパワーの源となっていると思う。

防大少林寺拳法部にこの伝統がある限り常勝集団としての地位を維持できるはずである。来年の団体演武で必ず優勝することが私の、私たち三十九期の目標です。

杉原　正典

我々３９期が防大少林寺拳法部に入部して、早いもので、２年が過ぎ、入部当初道着姿が初々しかったのが、体に似合うようになってきました。立場も、上級生にただついていくだけでなく、３８期の先輩方を助け、部の中核として雰囲気を盛り上げていくというものになりました。今後は、団体演武に向けて技量の向上に努め同期同士で切磋琢磨し合って行こうと思います。また、防大少林寺拳法部の伝統と実績を誇りに思い、後輩たちの良き手本となるべく練習に励んで行こうと考えております。特に団演においては、その結果が直接「部の伝統・実績を引き継げるか否か」、「後輩たちへの手本となれるか否か」に関係してくるため、少しでも良い結果を残したいと思います。

まだまだ未熟ではありますが、今後とも精一杯努力して行きますので、諸先輩方の暖かいご指導のほどを、宜しくお願い致します。

筒井　茂広

我々三十九期は少林寺拳法をはじめて一年と六ヶ月、おのおのの初心を胸に今までやってきました。今では帯も念願の黒帯となり、少林寺拳法部の一員としての誇り・自覚そして次に政権を取る者としての責任を一層強く感じるようになりました。そしてこの次はいよいよ団体演武です。練習においても、一から十まで教えてもらうのではなく、自分達で考え悩み、うまくなっていかなくてはなりません。技の表面だけではなく、本質をも学びとる必要があります。今まで以上の団結も必要になります。日本一の伝統を引き継ぐため、諸先輩の苦労に報いるため、必ずや日本一を我らの手でもぎ取り、三十九期ここにありと胸を張って言えるように頑張ることが私の抱負であります。

徳丸　辰哉

去年の春に入部してから、約一年半少林寺拳法を続けて今思うことは、体力を向上させられたことと、同期と深い団結を結べたということです。きつい練習を通してお互いの信頼や思いやりといったものはもちろんのこと、連帯感、団結を得ることができました。これはごく最近のことで、以前はこのようになれず、ただついていくだけの練習でした。全自衛隊大会において良い成績をあげることができ、この時初めて、苦難を克服し、満足感を皆で一緒になって感じあえたことが嬉しかったです。練習は厳しいものでしたが、それに耐え、一生懸命やってきたことが今回の結果につながったものと確信しました。

まだまだいろいろときついことが続きますが、いままで克服してきたということを土台にして、さらに頑張っていきたいと思います。

鳥越　渉

昨年五月、少林寺拳法部に入部し初めて校友会活動、運動部というものを知ってからもう一年半が過ぎようとしている。

私が入部したときに目標にしたことは、「自信を得ること」であった。自分から進んで体を鍛えることはなかったが、少林寺拳法をはじめてから、いくらかは体力も気力もついたように思う。いろいろときついこともあったが、何とかこなしながら今までやってこられたし、いままで二回の大会に出場し、先日全自衛隊大会において団体演武で優勝したときは、何か一つやり遂げたような快い気分がした。今後の関東、全日本に向けて、本格的な団演の練習が始まる。皆と息を合わせてやっていきたい。

私はまだ入部当初望んでいたほどの自信も実力も持ってはいないけれども、少しでもそれに近づき手に入れられるように努力しようと思っている。

中村　公多朗

少林寺拳法を続けてきて思ったことは、夜寝るときのあの幸福感、朝目が覚めたときの憂鬱感、クラブの前のあの緊張感は、他のクラブのものには絶対に味わえないものだと思う。こうまできつい思いをして自分が少林寺拳法部から得たものは何かと考えるとき、こう断言できる。”根性だ”と。黒帯をとるまでに流した汗と、二ヶ月間の演武練習は、自分に強い精神力を培ってくれた。また、同じ練習メニューについてこられない者を怒鳴るばかりだった一年の時と比べて、仲間だという意識が強くなり、励まし合うようになったことは多少なりとも進歩があったと考えたい。

我ら三十九期はこれから団演を経験するわけだが、全日本学生大会優勝、日本一という大きな目標に向かってみんな一丸となって突き進みたい。自分はその責任の重さを自覚して、毎日の練習を大切にしていきたい。

西田　美嗣

少林寺拳法の道に足を踏み入れてから早や一年半が過ぎた。
少林寺拳法とは一体何なのか？この現代社会の中にあって、武道が果たすべき役割とは何か？　自分の心と五体を鍛え、追い詰めることで、このような少林寺拳法の社会的・哲学的意義を見つめ、少林寺拳法の極意というものに一歩でも近づけるよう、日々精進してきた。これまで私は、「少林寺拳法に青春を賭ける」という大義名分のもとに、多くのことをなおざりにしてきた。ある時期、それは正しい選択だったとは思っている。だが、今後私は社会に生きる人間としてーー飽くまでも社会の一員としてーーその義務を全うしながら生きていかなくてはならない。このことを念頭に置いておきたい。
最後になりましたが、自分を振るという貴重な機会を与えて下さった部長・監督・顧問・諸先輩方に対して、心からお礼を申し上げます。

野本　肇

私が少林寺拳法をはじめて一年半になる。その練習内容は厳しいもので試練の連続であった。しかし、その試練を乗り越えることによって、少林寺を始める前よりも確実に自分を進歩させられたのではないかと思う。肉体的に鍛えられたのは言うまでもないが、私はそれよりも精神的な面を鍛えられたことの方が大きな意味を含んでいるように思う。「己こそ己の寄るべ」という少林寺拳法の教えにあるように自らが信頼できる自分を確立することの重要性を最近少し実感できるようになった。
さて、今後とも少林寺拳法を続けていく上で、反省すべき点として二点があげられる。その一つは、練習に受け身の態度で臨んでいた、ということであり、もう一つは実戦で使える段階に達している技がほとんどないということである。私は、初段という段位に恥じぬようにこの二点を改めて、少林寺拳法の練習をしていきたいと思う。

福田　健哉

防大少林寺拳法部は毎年、全日本学生大会等において優秀な成績をあげており、その練習は半端なものではないと噂には聴いていたが、果たしてその通りであった。練習中は四年生が鬼に見えたこともあった。しかし、練習が終われば先輩は親切であった。何よりも、入校時よりは体力もついたと思うし精神的にも強くなったのではないかと思う。そして、先だっての全自衛隊大会において優勝することができた。これからの目標としては、関東学生大会、全日本学生大会で三十九期が団体演武優勝をかちとることである。その十二人のレギュラーの中に自分も入りたい。そのためには常に積極的に練習に取り組むことが大切であると思う。基本を大切にして頑張っていきたいと思う。

前床　泰彦

中学、高校と本格的な運動をしていなかった私にとって、防大少林寺拳法部に入部することは、たいへん不安で勇気のいることだった。体力的な面が非常に心配だった。事実、入部当初にくらべればいくらかは体力の向上が見られる現在においても、毎日の練習は、私にとって厳しいものである。しかし精神面では、だいぶ成長し強くなったように思う。少林寺拳法の本質と修行の目的は、肉体と精神の両面での修行によって、本当に自分が頼りとすることのできる自己を確立し、さらに自信と勇気、行動力、慈悲心、正義感を植え付ける宗門の行である。

今後は、もっと体力をつけ、それに応じてより多くの技を練習し、それらと並行して、社会に対して積極的に働きかけていく能力を備えた自己へ、自らを作りかえていきたい。

三好　英治

少林寺拳法部に入部してから一年半がすぎようとしている。強くなりたい、これが私の入部動機である。一年半続けてみて強くなれたかどうかは良く分からないが、精神的には強くなれたと思う。

先日全自衛隊大会に出場したが、これは私にとってはじめての大会であった。にもかかわらず、それほど緊張せずにできた。他の理由があるにしても、やはり今までやってきたという自信があったからだと思う。その自信が優勝へと導いてくれたといっても過言ではないだろう。

この一年半、苦しいこと、つらいことを数多く経験してきたが、その分やり遂げたときの感動はこの上無いものがある。

少林寺拳法は己を鍛えるものである。これからも練習に励み己のいろいろな面を磨いていきたいと思う。

松崎　徹

私が、少林寺拳法部に入部してから早くも一年半が過ぎ、帯の色も「白」から「黒」になった。何も分からなかった入部当時から、気がつけば自分達が団体演武やる時期になっていた。ここに至って、自分は何を得たのだろうと考えてみると、なかなか思いつかない。確かに、初段という資格は得られた。しかし、肉体的にも、技術的にもまだまだであり「得た」といえる段階には達していない。けれども精神面においては、自己評価ではあるが、得たものがあると思える。それは自己を犠牲にする精神と人の痛みを知る心である。この二つのものを得たことは私の防大生活において、大きな収穫であった。さて、これから得るものは何であろう。今はなんとも言えないけれども、希望としては技術的な発展と平衡した精神を日々の精進の中で得たいと思う。

４０期　「今後の抱負」

阿達　文明

私は、部を決める際、少林寺拳法部にするかどうかをたいへん悩んだ。その結果、少林寺拳法部に入部することに決めた。なぜならば、空手はほとんどが「突き」と「蹴り」だけであるのに対して、少林寺拳法は「剛法」「柔法」「整法」の三つ、突き・蹴り・投げ・固め・関節技があり、技のバリエーションに富むことに魅かれたからである。

少林寺拳法の技を実戦で使えれば、まさに無敵であると思うが、実際はそううまくいかない。突然、殴りかかってこられたり、胸ぐらを掴まれたりしたとき、素早く対処できるか、技が正確にかけられるか、と言うと自信がない。

これからは、技の本質を学びつつ、その技を実戦にも使えるようにするため、毎日の修行に励んでいきたいと思う。

岩本　正臣

少林寺拳法部に入り、はや半年経った。思い起こしてみると、つらかったときのことばかり浮かんでくる。いままで大したつらさも知らない私に一気に「本当のつらさ」を教えてくれた六ヶ月間だった。

今後の抱負としては、まだ大したことは言えないが、上級生に注意された事項についてただ単に直そうとするのではなく、その意味を良く考え、理解した上で改善する。そのようにしなければならないと思った。また、演武主体の期間中にどうしても「上級生にやらされている」と思ってしまうケースが多かった。
もっともっと自分から積極的に練習に参加しなければならないと思った。以上のようなことを私の今後の抱負としてあげたい。

上野　洋介

五月に入部して、六ヵ月が過ぎた。前期は二年生の方々にひっぱってもらいどうにか乗り越えてきたが、中期に入ってからは私たちが番号をかけるなど、今度は徐徐に私たちが厳しい状況となってきた。また、演武が主体となり、私は団体演武を経験した。二年生に混じって出場した演武が全自衛隊大会で最優秀賞をとれたことは、とても嬉しかったことである。

さて、演武主体の期間も終え、これからであるが、気を引きしめて頑張って行きたいと思う。四十期は十二人と少なく、きつい面も多くなってくると思うが、同期の団結というものを十分に培って、後にひかえる全日本学生大会で連続優勝を遂げられるよう、一つになって練習して行きたいと思う。

自分から積極的に練習に取り組んで、新しいことをつかめるよう、日々努力して行きたい。

川崎　英輔

私は今回、全日本学生大会に出場したのだが、入賞できなかった。その原因の一つは、技の正確さが足りなかったことだと思われる。それ故に今後は、突き、蹴りの軌跡を正確にし、ブレることのない突き、蹴りが出せるようになりたいと思う。もう一つの原因として、突き、蹴りそれ自体のスピードがあげられる。東京大学の演武が優勝した理由としてあげられると思う程、一発々々の突き、蹴りがスピードにのっていた。で、あるから私もこれを見習って素早く突き、蹴りが出せるようになりたい。その為には、逆足の蹴り、腰の回転、肩の返しを速くする必要がある。この三つを日頃から気に掛けることによって速くしていきたい。

最後に、今回の全日本学生大会は優勝を逃したが、これからの関東学生大会、全日本学生大会にも、選手として出場し優勝したい。

熊本　巌

私は先日行なわれた全自衛隊大会において、級拳士の部に出場しました。その中で二つの大事なことを学びました。一つは、大舞台でいかに緊張感をほぐして演武を行なうか、もう一つは基本の重要性です。今回もそうでしたが、人前で演武をするとなると、緊張しすぎて体の動きが固くなります。この欠点を補う方法が見つかりました。それが、「基本」です。普段の練習の時から、しっかり肩・腰を回して突き、蹴りを出し、それが体に染み着いていれば、多少緊張したとしても、体が自然に動いたはずです。まだ、自分の体に染み着いていなかったのだ、と実感しました。そこで、これからはこの二つのことに注意していこうと思います。緊張感を持ちながらも固くならず、基本に忠実に練習をすること、これがこれからの私の課題です。

小坂　淳

私が防大少林寺拳法部に入部して、はや七ヶ月がたちました。入部当初からの「強くなりたいから」を出発点として様々な心境の変化を経過し現在に至る訳です。現在の私は、自分が入部当初から変わった、ということを感じています。現実として、自分の望むように強くなったかどうかはいまだ疑問ですが、体力的にも精神的にも少しずつ強くなってきたと思います。実際は、自分が思っているほど強くなっていないのかもしれませんが、毎日の練習によって自分を信じられるようになったことは確かです。

私の今後の目標は、体力をつけ、精神を鍛え、技を上達させて、自分への信頼を高められるように努力していくことです。

高田　善行

防衛大で少林寺拳法を学ぶようになってから、七カ月がすぎようとしています。いままで、武道の経験は皆無、高校時代には何のクラブ活動もしていなかったという私にとって、少林寺拳法部の練習は肉体的にも精神的にもきついものがありました。しかし、その練習のおかげで、入校当初に比べ体力も精神力も、かなりついてきたと思うのです。私は「強くなる」ために少林寺拳法部に入りました。それに少しは近づけたと思うのです。

しかし、まだまだ（特に精神面において）弱い面があるので、自分に負けないことをこれからの抱負として、これからも頑張って少林寺拳法を続けていきたいと思います。

永友　恒知

私が防大に入って七ヶ月、少林寺拳法部に入部して半年がすぎた。その間、合宿や様々な大会があった。入部時に比べれば僅かではあるけれども体力がつき、上手になっていると思う。これからは、体力をつけて肉体的にも強くなりたいが、それ以上に柔法などに特に必要な技術的な面も身につけて、どんな状態からでも技がかけられるようになりたい。まず、単純な技を完璧にできるようにしたい。

また、四十期は現在十二人と数が少ない。だから、協力して全員が少林寺拳法を続けていけるようにしたい。そしてこの次は後輩をもつ身となるが、私たちのように部員が少なくて困るようなことがない様に、できる限り多くの四十一期生を入部させたい。さらに私たちは、下級生を常に引っ張っていけるような上級生となれるよう、日頃から努力を継続していきたい。

奈良　一志

私のこれからの抱負は、強くなることは勿論ですが、それぞれの技の中で行なう個々の動作についてその意味を深く考えていくことです。実際に技の理論を学ぶことにより、その技がより自分のものとなっていく。このことを念頭において続けていきたい、と思います。

また、少林寺拳法部の部員として、その名を汚さぬよう、一生懸命前向きに物事に対処していきたいと思います。さらに、同期の団結を大切にし、他人のために尽くすよう努力し、他人からの信頼を得ることができるように日々の生活においても頑張りたいと思います。

どんな人にも、やさしい心を持って「一期一会」の精神を持って接することができるよう、「ひと」としても成長していきたいと思います。以上に挙げたものが、私のこれからの第四十期少林寺拳法部員としての抱負です。

守井　孝志

私は防大にはいる前は剣道をやっていました。剣道をしている頃の自分を思い出そうとすると、悔しさしか浮かんできません。高校最後の試合となる県大会で、二回戦、準優勝の学校とあたり完敗してしまいました。向こうは一日中、こちらは一日一時間の稽古、その差が出たまでのことだろう。そんなことは頭で理解できても悔しくて仕方がありませんでした。「一体今まで何をしてきたのだろう」と思いました。その時、つらい稽古を避けてきた自分を悔やみました。こんな思いは二度としたくない、精一杯努力して克ちたい、と思いました。だから短い練習時間でも強くなれる少林寺拳法部に入ったのです。実際練習内容は私にとって厳しいものです。しかし苦しいことは後の自分に良いこととして返ってくると信じています。それに最近は、少林寺拳法の技に魅力を感じるようになりました。これからも練習の苦しさを乗り越えていくつもりです。

山田　賢治

少林寺拳法部に入部してからもう六ヶ月がたちました。その間、五日間の夏合宿や試合に向けて二ヶ月間取り組んだ演武の練習と、はじめて「横須賀市民大会」という試合に出場したこと、三十七期から三十八期への政権交代などを経験し、少林寺拳法がどの様なものか、防大少林寺拳法部がどんなクラブであるかということについて多少なりとも知ることができました。そして思うのが、このクラブを続けていれば入部するときの目的であった「強い男になる」ことができそうだということです。確かに練習は厳しく、休みたいと思うときもありますが、続けていれば絶対自分のプラスになると思いますし、やめてしまえばマイナスになると思います。ですから、これからも少林寺拳法を続け、積極的に練習に参加し、「強い男」になれるように一生懸命頑張りたいと思うのです。

綿貫　俊一

私が少林寺拳法部に入部して、半年が過ぎようとしています。ただ、強くなりたい！という理由のみで入部し、自分が何をすれば良いのか分からないまま、「四年生になりさえすればきっといいことがあるだろう」と考え、がむしゃらに練習をしてきました。しかし、この短い期間に感じたこと、残ったものは多く、その中からわずかながらも目標のようなものがぼんやりと浮かび上がってきました。それは、仲間を大事にすること、自分に負けないこと、先輩を信じてついていくことです。

どれも当たり前に言われていることですが、部の活動の中でその難しさを実感すると同時にその大切さ、良さも改めて感じることができました。

私は、今感じていることを大切にし、先輩の方々が作り上げた伝統に恥じることの無いよう、今後の活動に専念していきたいと思います。

平成４年度防衛大学校少林寺拳法部

§ 部長・顧問等

部長	菅野　等	（教授）
師範	田村　倉蔵	
	神田　憲和	
監督	相良　達也	（２６Ｎ）
顧問	紫村　敬二	（１８Ａ）
	迫田　直心	（１９Ａ）
	小林　実	（２０Ａ）
	濱田　秀	（２７Ａ）
	時久　寛司	（３０Ｎ）
顧問	亀山　慎二	（３１Ａ）
	富樫　勇一	（３３Ａ）
	柿野　忠嗣	（３３Ａ）
	小田　益男	（３２Ａ）
	松井　健一	（３１Ａ）

§ 第３８期幹部

主将	241(3)	奇藤　浩	
副将	322(3)	向井　洋史	
統制長	412(3)	平井　穣治	
道場長	322(2)	長濱　誠	
３年係	412(3)	高岡　徳人	
２年係	421(3)	城戸　利彰	
	343(3)	尼子　将之	
１年係	311(3)	宮下　克聡	
	423(3)	中村　格	
	322(2)	長浜　誠	
訓練係	412(3)	高岡　徳人	
	313(2)	達下　裕教	
師範係	343(3)	尼子　将之	
主務	232(3)	高橋　俊隆	
	423(3)	中村　格	
会計	322(3)	黒子　智彰	
安全係	443(3)	佐藤　滝大	
渉外	343(3)	尼子　将之	
本山係	443(3)	佐藤　滝大	
学連係	412(3)	平井　穣治	
ＯＢ係	311(3)	宮下　克聡	

22-9561

§　部員

37期　18

小隊	専攻	要員	氏　名
122	材物	航空	中居　景
123	応物	陸上	大山　剛
132	機シ	陸上	平瀬　慎
133	機械	海上	石原　寿英
142	材物	海上	岩本　正行
211	精機	陸上	河合　寿士
222	情報	海上	木下　治信
241	精機	陸上	冨原　大治
241	情報	陸上	児玉　洋
243	情報	海上	鈴木　隆弘
311	電子	陸上	山下　豊
322	通信	海上	高取　哲郎
411	管理	陸上	古田　和之
422	地球	陸上	吉田　文二
423	航宇	航空	矢坂　勝良
423	管理	陸上	森安　宏徳
433	航宇	航空	久重路　剛
442	地球	航空	塚原　敏夫

39期　19

小隊	専攻	要員	氏　名
132	応化	陸上	小澤　謙雄
132	応化	陸上	三好　英治
213	土木	陸上	杉原　正典
221	航宇	航空	大塚　晋介
221	管理	陸上	福田　健哉
222	航宇	航空	前床　泰彦
223	航宇	陸上	井上　裕策
232	管理	航空	久保　敦
233	管理	陸上	野本　肇
322	理工		徳丸　辰哉
323	機シ	陸上	中村　公多朗
331	応物	海上	松崎　徹
341	機械	陸上	西田　美嗣
343	材物	海上	大松　清生
343	理工		筒井　茂広
343	機シ	海上	鳥越　渉
411	国関	陸上	井上　嘉史
411	国関	陸上	遠藤　英隆
431	人文		朽木　誠

38期　14

小隊	専攻	要員	氏　名
112	情報	陸上	水野　亮二
232	電子	海上	高橋　俊隆
241	通信	陸上	奇藤　浩
311	地球	陸上	宮下　克聡
313	機シ	陸上	達下　裕教
322	地球	陸上	黒子　智彰
322	応物	陸上	長濱　誠
322	航宇	航空	向井　洋史
343	土木	陸上	尼子　将之
412	機シ	陸上	高岡　徳人
412	機シ	陸上	平井　穣治
421	機シ	陸上	城戸　利彰
423	機械	海上	中村　格
443	機械	海上	佐藤　滝大

40期　12

小隊	専攻	要員	氏　名
142	理工		阿達　文明
221	人文		熊本　巌
231	理工		奈良　一志
233	理工		高田　善行
241	理工		上野　洋介朗
322	理工		岩本　正臣
322	理工		川崎　英輔
322	理工		小坂　淳
322	理工		山田　賢治
341	理工		綿貫　俊一
341	理工		永友　恒知
423	理工		守井　孝志

32
31

平成４年度成果報告

横須賀市民大会

級拳士の部	最優秀賞	322(1)	小坂	淳	341(1)	永友	恒知
	優秀賞	322(1)	山田	賢治	341(1)	綿貫	俊一
初二段の部	最優秀賞	213(2)	杉原	正典	341(2)	西田	美嗣
団体演武の部	最優秀賞	241(3)	奇藤	浩	343(3)	尼子	将之
		311(3)	宮下	克聡	412(3)	高岡	徳人
		313(3)	達下	裕教	412(3)	平井	穣治
		322(3)	黒子	智彰	421(3)	城戸	利彰
		322(3)	長濱	誠	423(3)	中村	格
		322(3)	向井	洋史	443(3)	佐藤	滝大

全日本学生大会

衆敵闘法の部	優良賞	142(4)	岩本	正行	422(4)	吉田	文二
		222(4)	木下	治信	433(4)	久重路	剛
団体演武の部	最優秀賞	241(3)	奇藤	浩	343(3)	尼子	将之
		311(3)	宮下	克聡	412(3)	高岡	徳人
		313(3)	達下	裕教	412(3)	平井	穣治
		322(3)	黒子	智彰	421(3)	城戸	利彰
		322(3)	長濱	誠	423(3)	中村	格
		322(3)	向井	洋史	443(3)	佐藤	滝大

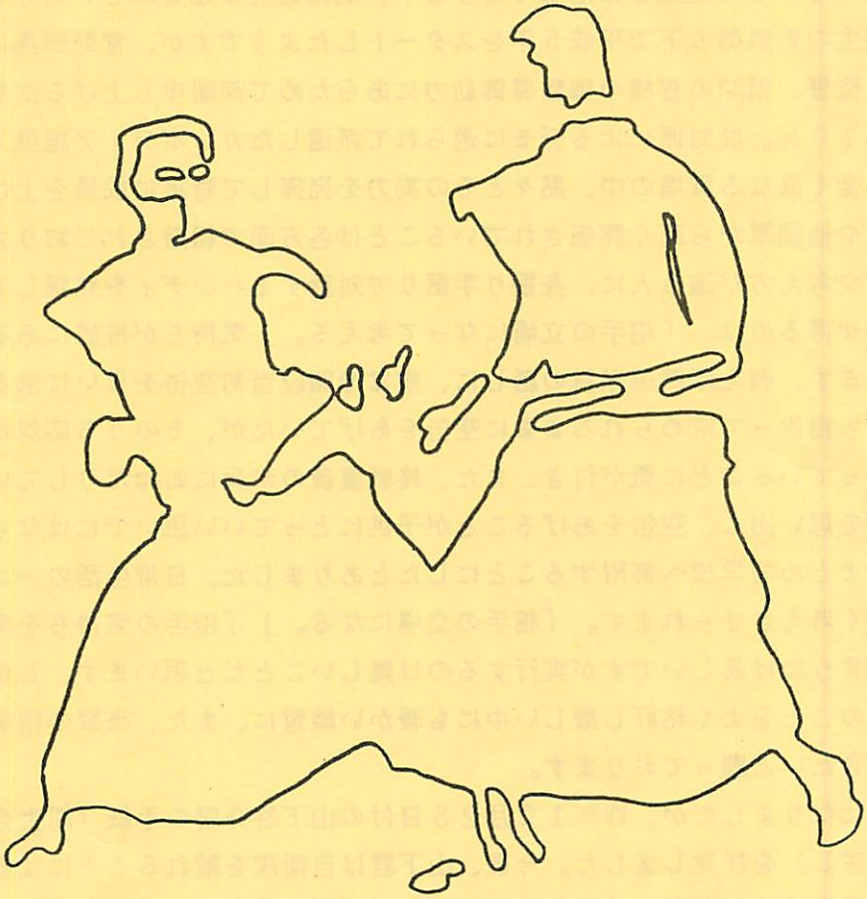
全自衛隊大会

級拳士の部	優秀賞	221(1)	熊本	巌	322(1)	岩本	正臣
准拳士の部	最優秀賞	232(2)	久保	敦	233(2)	野本	肇
	優秀賞	323(2)	中村	公多朗	411(2)	遠藤	英隆
中拳士の部	優良賞	122(4)	中居	景	241(4)	児玉	洋
団体演武の部	最優秀賞	132(2)	小澤	謙雄	223(2)	井上	裕策
		132(2)	三好	英治	322(2)	徳丸	辰哉
		221(2)	大塚	晋介	343(2)	鳥越	渉
		221(2)	福田	健哉	241(1)	上野	洋介

少林寺拳法部　年間計画

睦月	中旬　寒稽古	文月	－－夏季定期訓練－－
如月	中旬　ＯＢ杯演武 中旬　納会	葉月	－－夏季休暇－－ 上旬　夏季（本山）合宿
弥生	下旬　春季合宿 春季休暇	長月	中旬　夏季競技会
卯月	上旬　入校式典 下旬　春季競技会	神無月	下旬　全日本学生大会
皐月	上旬　関東学生大会	霜月	中旬　開校記念祭 下旬　体育競技会
水無月	上旬　早慶防定期戦	師走	下旬　冬季休暇

奥平会報



巻　頭　言

奥平会会長　　清水重周

合　掌

奥平会会員の皆様には輝かしい新年を迎えられ、益々御壮健にて御活躍のこととお慶び申し上げます。

防大少林寺拳法部は、昨年は不幸な出来事によりしばらくの間対外試合から遠ざかっていましたが、試合再開とともに次々と優秀な成果を獲得できましたのは、主将を核心とする団結、厳格な練習で培った実力、勝利に対する飽くなき追求が真のものであった証左と確信しております。既に過去の忌まわしい気分を払拭し、３８期生の新態勢の下で平成５年をスタートしたようですが、菅野部長はじめ、師範、監督、顧問の皆様の御教導御助力にあらためて深謝申し上げる次第です。

昨年１０月、反対派によるデモに送られて派遣したカンボディア施設大隊は、日本と全く異なる環境の中、黙々とその実力を発揮して着実に成果を上げ、現地の人々や他国軍から高く評価されていることは各方面で報道されております。物の見方や考え方が違う人に、身振り手振りで対話するハンディを克服して意思を疎通させ得るのは、「相手の立場になって考える。」気持ちが根底にある所以だと思います。例えば派遣隊員の話しに、宿営地開設当初空缶を貰いに来る子供に可愛さも相俟って求められるままに空缶をあげていたが、そのうち応対がぞんざいになっていることに気が付き、また、終戦直後の米兵におねだりしていた日本の子供を思い出し、空缶をあげることが子供にとっていい思いでにはならないと思い、まとめて学校へ寄附することにしたとありました。日常生活の一コマですが、深く考えさせられます。「相手の立場になる。」「相手の気持ちを考える。」これは言うのは易しいですが実行するのは難しいことだと思います。しかしながら、このことをよく銘肝し厳しい中にも暖かい練習に、また、後輩の指導に当たって頂きたいと願っております。

終りになりましたが、昨年１２月２５日付の山下啓介君の手紙（期生会宛ての礼状の写し）を拝見しました。今後、山下君は自衛隊を離れることになるようですが、学生時代に労苦を共にした仲間として断腸の思いです。

山下君御家族の今後の御健勝と御多幸、並びに会員皆様の益々の御発展を祈念申し上げます。

結　手

紹　介

監督　１等海尉　相良達也

合　掌

４年半前、奥平会として「なだしお」元艦長である１５期山下先輩に対し、事件に関わる御心痛を察し、僅かながら御見舞金を送らせていただきました。過日、「なだしお」公判の刑事判決が終了したことから山下先輩より奥平会宛に支援金と書簡による感謝の辞を寄せていただきました。この支援金は防大少林寺拳法部創立３０周年記念祝金としてお受けすることといたしましたので山下先輩からの書簡とともに御紹介いたします。

結　手

平成５年１月記

拝　啓

新たな年を迎え、皆様には御壮健にて御活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、御承知のとおり昨年末、私に対する刑事判決が下されました。

大変重い責任のある艦長に補されながら、皆様の信頼に答えられず、海上自衛隊始まって以来の重大な事故を起こし、誠に申し訳なく思っております。

事故当初から今日まで、様々な報道がなされるなかで、奥平会として物心両面にわたり私や家族を暖かく励まして頂きましたことを、有り難く感謝いたしております。

奥平会の支援のご趣旨に従い、私の身の周りで自由に使わせて頂きました。

今回の判決につきましては、海難の原因究明と再発防止を主目的とした海の専門家達による海難審判において、「航法」についても、また今回措信できないと判断された「舵が取られた時期」についても、私の申し上げていることが事実であるとの結論を既に得ていること、今回の裁判は、私個人の刑事上の責任追求を主目的としたものであり、多数の方がお亡くなりになられていることを考えると当然な結論であることから控訴せず、御遺族に心からお詫び申し上げることといたしました。

最後に、この四年半を過ごすことができましたのも、皆様方の暖かい御支援と防衛大学校における「少林寺の教え」のお陰でございます、奥平会の皆様に対し重ねて厚くお礼申し上げます。

結　手

平成五年正月

山下 啓介

平成３年度奥平会活動概要等

１．現役部員に対するご支援
春季・夏季合宿、関東・全日本学生大会、全国自衛隊大会等に対し支援を実施致しました
ご多忙中、大会等の応援に駆けつけて下さいました皆様に、感謝致します。
ありがとうございました。

２．会員名簿につきましては、関係資料を熟読して、正確に記載するように努めましたが、名簿中会員で所在不明の方、所属・連絡先の不明または間違いが、若干あります。ご存じの方がありましたら、本部宛にご連絡ください。（特に自衛官以外の方の住所を宜しくお願い致します

３．会員の慶弔に関する事項につきましては、会員の皆様のご連絡に頼らざるを得ない現状ですので、ご本人もしくは近傍の会員の方からご一報頂きますようにお願い致します。

４．本部連絡先
〒２３９　横須賀市走水１－１０－２０
防衛大学校訓練部４３中隊　古　賀　１　陸　尉（第２８期生：庶務）
ＴＥＬ　（専用線）８－４０－２６４３
（局　線）０４６８－４１－３８１０　内２６４３

＊＊

平成４　年度奥平会本部

会　長	１４Ａ	清　水　重　周	幹　事	３１Ａ	亀　山　慎　二
副会長	１８Ａ	紫　村　敬　二	幹　事	３２Ａ	小　田　益　男
会計監査	１８Ａ	紫　村　敬　二	幹　事	３３Ａ	富　樫　勇　一（会計）
幹　事	１９Ａ	迫　田　直　心	幹　事	３３Ａ	柿　野　忠　嗣
幹　事	２０Ａ	小　林　　実			
幹　事	２６Ｎ	相　良　達　也（監督）			
幹　事	２７Ａ	濱　田　　秀			
幹　事	２８Ａ	古　賀　敏　明（庶務）			
幹　事	３０Ｎ	時　久　寛　司			

平成４年度会計報告

（Ｈ４．１．１１～Ｈ５．１．２２現在）

収　　入		支　　出	
前年度繰越金	910,550	記念品	64,770
転属者送別会費	33,000	木札作成費	82,140
ＯＢ会総会費	32,000	現役支援	
ＯＢ会費（３６期）	720,000	全日本大会	146,000
校友会旅費	38,820	全自大会	150,000
利息	41,217	市民大会	60,000
		合宿	76,345
		関東ＯＢ会関連	46,000
		部長御母堂御逝去	22,688
		幹事会活動費	158,015
		通信事務費	4,4280
		部誌発行費	182,700
合　　計	1,775,587	合　　計	1,032,938

残高（収入－支出）＝７４２，６４９　次年度繰越

奥平会名簿

1　名誉会員

職名	氏　名	所属等	官職	内線	連絡先
部長	菅野　等	化学教室	教授	2401	〒236横浜市金沢区釜利谷町945－1 コスモ金沢文庫ルシード411 TEL045－788－5877
師範	田村倉蔵				〒187小平市学園東町685－15 TEL03－3261－0955
師範	神田憲和				〒272市川市鬼高2－12－5－705
前部長	丸川武志				〒120足立区小台2－33－2 TEL03－3919－5910
前校友会部長	土田國保 （第4代学校長）				〒115東京都北区西が丘1－28－4 TEL03－3900－0409
元顧問	奥平正人 奥平会名誉会長				〒828豊前市小石原392
〃	松木　吉				〒所沢市泉町908－21
〃	前原良弘				〒藤沢市高倉950－5
〃	松本　宏				〒110立川市若葉町1－13－2 けやき台団地18－203
〃	宍戸俊之	第2術科学校付			〒237横須賀市田浦港町24 TEL0468－22－3500
〃	森田晃一	空自第1術科学校 総務課長			〒432浜松市西山町無番地 TEL0534－72－1111
〃	辻　勇雄	海洋業務群わかさ 船務長兼副長			〒237横須賀市船越町7－73 TEL0468－61－8281～8
〃	今別府 政実	陸自第8特科連隊			〒860熊本市八景水谷2－17－1 TEL096－343－3141
〃	富野　博	北　空			〒033青森県三沢市後久保125－7 TEL0176－53－4121
〃	米村 ゆかり	装備開発実験隊			〒410－14静岡県駿東郡小山町須走481-27 TEL0550－75－2311～6

10~16

5
5 26

期別	姓名	出身地等	所属部隊等	備考
10 A	田野 弘 明	馬原 相ヶ谷	1 2 部	
〃	藏重 耐 男	市町	陸自教育部	
〃	清水 鷲 一	檜町	陸幕付	
〃	松島 頼 夫	金沢	第1連隊	
〃	三井 光 人	1-ｺﾞｽﾗﾋﾞｱ	日本大使館	
10 F	鈴木 勝 一	浜松	第1術科学校第2教育部教育第8科	
〃	出田 昭	〃	第1術科	
10 N	岡崎 昭 一		〒238-01 三浦市南下浦町上宮町1334-12 三浦海岸ハイツ14-1441	
11 A	野ヶ崎 建 朗	日本原	第13師団特科連隊	
〃	勝須 了 英	北熊本	第18師団業務隊	
〃	広瀬 征 夫	檜町	檜町補給処	
〃	水上 照 夫	松戸	需品補給処	
11 F	坂田 勇 作	退職	南国殖産（株）	
〃	清水 正 昭	〃		
〃	田谷 俊 睦	石川	石川地区連隊長	
〃	藤田 尚 之	府中	総司令部装備課	
〃	佐藤 正 秀	芦屋	第12飛行教育隊	
11 N	渡部 貞 吉	鹿屋	第32衛生群第4飛行隊	
12 A	新井 宏 治	呉	第一護衛隊「まつゆき」	
〃	衛藤 利 治		第一衛生処	
12 F	田中 紘 徳	前橋	幹部候補生学校教育部	
〃	野口 昭 凡	入川	第4補給処1班	
12 N	佐藤 備 夫	檜町	第4幕僚監査方式	
〃	津川 保 幸	難波	地方総監部第2護衛隊	
〃	橋田 典 雄	呉	地方隊監開発隊	
13 A	石原 薩 成	横須賀	自衛隊師団付隊長	
〃	白川 克 之	福岡	第4師団連隊長	
〃	高本 俊 秋	栃木	栃木地方隊司令	
〃	戸田 勝 樹	岐阜	岐阜教育隊長	
〃	西村 修	檜町	需品課	
〃	富田 剛	陸幕	陸幕防衛部	
13 F	生駒 良			
14 A	藤井 正 二	福島	西警団第1警備隊	
〃	水戸 重 精	江戸	富士教導団	
〃	水原 直 周	退職	日本B師団	
〃	原田 勇 正	檜町	陸幕L監部	
〃	井上 敏 男	長野	長野方面特科	
〃	瀬田 岸 男	札幌	札幌地区補給処	
14 F	口 好 美	日本	北部方面特科	
〃	杉 則 広	退職	第13機械器具隊	
〃	高田 昌 之	〃	第3電子通信隊（株）	
15 A	森口 和 寿	岩国	第1航空隊	
〃	井上 義 信	三宿	技術研究本部	
〃	大竹 隆	~~札幌~~ 檜町	~~北部方面隊技術開発官（陸）5室~~	
〃	岡 敬	伊丹	~~北部方面隊技術運用課~~	
〃	長 研 天	武山	中部方面隊装備課	
〃	奥野 三 三	日本	少年工科学校	
〃	加藤 雅 千	宇治	第13地区補給処	
〃	遠田 良 夫	檜町	関西幕付隊	
〃	土居 昭 治	旭川	陸幕2部	
〃	花房 利 夫	仙台	第北方飛行隊	
〃	古川 徹 久	富士	東部方面隊	
〃	三嶋 光 克	檜町	装備幕付隊	
15 F	島田 健 夫	~~千歳~~ 札幌	~~中央資料室~~	
〃	野口 修 治	退職	第一幕僚監部	
15 N	福間 栄 二	檜町	統幕学校護衛隊	
〃	今村 啓 一	佐世保	海幕3部「おおよど」艦長	
〃	中島 富 介	檜町	潜水艦隊	
〃	山下 晃 雄	船橋	東京地区司令部	
16 A	山崎 正 一	市ヶ谷	中央隊	
〃	内田 二 郎	檜町	第3師団	
〃	岡田 健 治	海田市	業務隊	
〃	佐々木 準 一	小平	中部方面総監部	
〃	斉藤 啓 士	伊丹	大阪教育隊	
〃	竹内 富	大阪	統幕教育訓練部	
〃	富本 晃	市ヶ谷	陸幕教育訓練課	
〃	平川	檜町	陸幕教育訓練課	

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
1 A	明 谷	市ケ谷	（A.G.S.学生）	
6ヶ F	広福享哲一正定保正吉鶴輝久吉誠賢芳雄幹潔博信義敏憲清剛道正清恒正正基彰睦重敏敏和仁章秀義久裕清幸秀清誠博忍直武清俊和光 原橋	小松	幹部移動警戒隊	
1 N	夫夫廣雄治志信 正芳孝	中瑞	佐世保補充部	
1 A	次二生 海吉博夫一明 夫幹幸夫文俊春 廣見明二人文雄二幸 樹 一樹司 心典宣明紀博 良崎	佐退	新宮業部	
7ヶ	芦田笠太部島本島池坂藤木橋安尾梅沢田川渡見 富岡田田田本岡嶋和藤田西野原野藤藤村源島 田辺原敦尾米濵藤原井柳田部留村梅	第北	防衛研究課	
7ヶ	小八阿福荒飯小小佐鈴高富中廣福村吉石稲澤永西細前松山塔西久安上大河川門工百平千中沢宮渡笠白長勘岩近平松青迫園津野廣東	陸中	陸上自衛隊研究所（計画課）	
7ヶ		陸通	陸上幕僚監部（企画編成）	
7 F		陸技	陸上幕僚監部本官団	
7ヶ		第東	第一師団西部方面隊	
7ヶ		空空	空幕人事部	
7ヶ		高百	高等学校	
7ヶ		空登	空幕人事部	
7 N		第下	第一師団司令部	
8ヶ		開槽	開発隊群	
8ヶ		陸	陸上自衛隊	
8ヶ		第	第一師団	
8ヶ		第	第一師団	
8 F		第	第一師団	
8ヶ		第	第一師団	
8ヶ		第	第一師団	
8 N		第	第一師団	
9ヶ		防	防衛庁	
9ヶ		陸	陸上自衛隊	
9ヶ		幹	幹部候補生学校	
9ヶ		防	防衛庁	
9ヶ		第	第一師団	
9ヶ		第	第一師団	
9 F		陸	陸上自衛隊	
9ヶ		補	補給処	
9ヶ		空	空自	
9ヶ		北	北部方面隊	
9ヶ		中	中部方面隊	

~~防医大~~ 訓練課 (5.8.1)

56/4

1646

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
19F	藤井弥	市ケ谷	補給本部	
〃	松下和	岐阜	飛行開発実験団	
〃	吉本睦	小松	航空幕僚監部	
19NA	濱谷博	檜町	海幕総務課	
20〃	浅原守	霞ヶ浦	航空学校	
〃	楠本昭	前原	幹部候補生隊	
〃	小林裕	防大	第1学生隊付指導教官	
〃	樺崎実	檜町	陸幕装備課	
〃	高岡喜	古河	施設補給処	
〃	仲原正	檜町	陸幕装備部武器課	
〃	半澤久	檜町	統幕幕僚室（2校）	
〃	馬場康	小平	調査学校	
〃	伏木修	檜町	装備武器化学課	
〃	山形享	檜町	陸幕人事部厚生課	
20F	石田克	大湊	第4警戒群	
〃	岸本裕	岐阜	飛行開発実験団飛行隊教育班	
〃	高林昌	檜町	空幕人事課	
〃	岳川久	檜町	空幕防衛部	
〃	南園清	三沢	北警団	
20NA	北村宏	檜町	海幕防衛部	
21〃	大谷孝	檜町	陸幕教育訓練課	
〃	加藤昭	守山	第1師団第1部	
〃	貴志隆	檜町	調査部	
〃	桑原倫	市ケ谷	統幕学校研究室	
〃	湖崎幹	檜町	中央資料隊	
〃	澤井隆	建軍	西部方面隊防衛部	
〃	園田研	檜町	陸幕教育訓練課	
〃	高橋郁	秋田	秋田地方連絡部	
〃	野中久	宇都宮	宇都宮業務隊	
〃	花田敏	宇都宮	中央調査隊	
〃	浜崎一	市ケ谷	第1特科連隊本部	
21F	渡部勝	豊川	0開発実験隊	
〃	木山幸	富士	装備幕	
〃	黒沢豊	檜町	統幕4室	
〃	真田雅	那覇	第83航空隊	
〃	朱雀永	春日	西部方面航空隊	
〃	杉本武	市ケ谷	シ ン ガ ポ ー ル 在 住	
〃	鎌島弥	退職	補給本部	
〃	沼田和	小松	堺市八田西町3－90－173	
〃	平本幸	小松	6空団	
〃	膚江行	那覇	第83航空隊	
〃	松本勝	芦屋	西部航空施設隊第3作業隊長	
21N	城山修	退職		
〃	福岡宏	呉	第1潜水隊群「いそしお」副長兼航海長	
〃	村田誠	江田島	第1術科学校教官	
〃	山口隆	船越	第11護衛隊群司令部	
22A	大本次	南恵庭	第10施設器材隊	
〃	財城建	~~札幌~~	~~北方面隊防衛部~~ 陸幕	
〃	島松昭	飯塚	第3高射特科群	
〃	永栄正	市谷	幹部学校	
〃	野口文	東千歳	第7師団3部	
〃	原田利	富士	富士学校	
〃	松本有	札幌	北部方面隊調査部	
〃	松村俊	勝田	施設学校	
〃	吉岡利	勝田	施設学校	
22F	木戸聖	小牧	教育隊	
〃	小関文	入間	航空開発実験群	
〃	酒井信	新田原	第5空団301飛行隊	
〃	室込勝	府中	総隊	
〃	永龍盛	檜町	空幕通信課	
〃	野村勝	檜町	空幕監理課	
〃	横手裕	檜町	空幕調査2課	
22N	高塚裕	佐世保	「海幕くらま武器課	
〃	塚田真	檜町	佐世保総監部防衛部	
〃	中谷茂	佐世保	第3列線整備隊長	
〃	延近保	厚木	第3ロジ業務隊	
〃	坊内恒	船越	輸送学校	
23A	奥野広	朝霞	第72普通科連隊	
〃	谷崎和	訓練所	第75普通科連隊中隊長	
〃	広塚敏	木更津	第24普通科連隊	
〃	日高雅	富士	装備実験隊	
〃	丸山政	東千歳	第11普通科連隊中隊長	
〃			第	

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
23A	秀徳文次	富士	総研究開発部	
〃	木元治清平	富士山	第3普通科連隊中隊長	
〃	三若岩浦	守目小	西方武器隊	
〃	杉田川	市退	第4普通科連隊重迫中隊長	
23F	池遠谷	市退	幹部学校付	
〃	馬谷	退	東大阪市日下町3－1－5－319	
〃	川添正		鹿児島市山田町2440－92	
〃	シ誠		夕イ王国在住	
〃	松ン一	三	防衛技術研究本部	
〃	宮尾茂	檜	空装備課	
23N	井田義	江	幹部補生学校	
〃	井ノ章	鹿	第1候補生整備隊長	
〃	数口雄	舞	舞鶴列線補充部	
〃	畑野定	江	第1術科学校付（専攻科）	
〃	山中一	山	山梨地方連絡部	
〃	四下行	檜	海幕調査第1課	
24A	浅元治	明		
〃	稲野生	檜	航空学校	
〃	太葉義	別	陸幕装備部武器化学課	
〃	大田志	土	第4普通科連隊	
〃	金久志	市	武器学校	
〃	芹田志	退	中部調査隊	
〃	高川美	退	（株）東京アイシーエス	
〃	常澤美	檜	小田原市千代475－1	
〃	中田介	名	陸幕防衛部研究課 嘱 美唄	
〃	西村司		第3普通科連隊中隊長	
〃	渕津則	東		
〃	堀保	檜	10測量大隊	
〃	山之藏	檜	幹部学校学生	
〃	山田隆	府	幹部学校学生（TAC）	
24F	佐川雅	市	総隊	
〃	清藤純	市	補給本部	
〃	出水秀	檜	中通群	
〃	中口尚	松	空幕通信課	
〃	藤館潔	那	第4航空団	
24N	山城利	横	第483潜水隊	
〃	小田希	舞	第2群幕僚	
〃	佐伯真	呉	「みさきゆめ」航海長	
〃	中村勝	退	「がね」	
〃	長谷奈	六		
〃	松田早	退	海幕調査2課	
〃	山本隆	退	北九州市小倉南区湯川3－8－6	
25A	石川俊	富	~~富士学校付~~ 防衛部防衛課 札幌	
〃	大内浩	市	幹部学校学生	
〃	岡元哲	富	富士特科部	
〃	小野正	八	第38普通科連隊第2中隊	
〃	小菅靖	土	武器学校	
〃	佐伯康	富	~~富士学校普通科部~~ 33中隊 防大	
〃	重石義	目	九州地区補給処	
〃	田草喜	富	富士学校普通科部	
〃	岩本茂	日	第13特科連隊	
25F	安芸順	市	幹部学校付	
〃	尾崎一	市	~~北空~~ 43中隊 防大	
〃	坂本信	市	補給本部	
〃	藤吉卓	檜	第3警戒群業務隊	
25N	内山恵	舞	「うおつりぐラム」	
〃	藏谷哲	呉	「しかけ」航務長	
〃	河村資	檜	「業務隊付」波大研修（国際政治）	
〃	杉原正	佐	「あさぎり」	
〃	高畠耕	厚	厚木プログラム業務分遣隊	
26A	石川修	市	第32普通科連隊	
〃	内海毅	立	立川業務隊付（NEC出向）	
〃	小野浩	目	技研第1研究所	
〃	及川長	富	装備開発実験隊	
〃	金子幸	土	武器学校教育部	
〃	河原寿	浦	第1通信大隊	
〃	坂野敏	富	富士学校機甲科部	
〃	谷崎佳	富	富士学校普通科部	
〃	滝沢俊	退	札幌市中央区南12西16 滝沢 由子方	
〃	友部由	市	東方面隊調査部	
〃	中村隆	退	北九州市小倉北区中井3－4－17	
〃	松田明	駒	第1機甲教育隊中隊長	
〃				広行
〃				正

8-362-221

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
26A	下田 隆	川田 旭	第2高射特科大隊中隊長	
〃	山田 清紀	田僧 勝	施設学校	
〃	吉田 英宏	妻千	第3施設大隊中隊長	
〃	吉田 琢也	間板	第3陸曹教育隊（上曹本部）	
26F	石山 暢輔	瀬入	4補整備	
〃	池田 優	瀬退	横浜市金沢区町屋町15-3	
〃	澤木 睦	~~城~~ 城	~~8空団~~ 31中隊	防衛
〃	福島 敦	城	8空団	
〃	星川 誠	谷ヶ	幹部学校付	
〃	米子 秀	市田	第1術科学校付	
26N	市坪 真	江本	厚木ブログラム分遣隊（専修科）	
〃	上野 寿	厚木	長官官房広報官	
〃	佐藤 義	六須	「せとぎりゆき」海務官	
〃	杉山 誠	横賀	「おおしま」船務長	
〃	道満 勝	呉	阪神基地隊付（神戸大修士：システム科学）	
〃	平野 伸	神戸	海幕総務課	
〃	水野 達	樽町	第2大隊2小隊指導教官	
27A	相楽 隆	防大	第24特科連隊第1大隊第1中隊	
〃	大石 基	久留米	第26普通科連隊第2中隊	
〃	大場	留		
〃	緒方	瑞	東北方武器隊	
〃	大居	仙台	千葉県船橋市習志野1-3-25緑ハイツ2号	
〃	川村 一	退	高等学校	
〃	行事	下津	普通科教導連隊	
〃	角南	滝	技研（4科研）	
〃	長谷	三	FS特科部教育課SSM班	
〃	津田	富士	第2大隊2小隊指導教官	
〃	濱田	防大		
〃	馬場	退	調査学校	
〃	難原	小平	第24普通科連隊重迫中隊	
〃	山上	え	中央資料隊5科	
〃	米山	檜の	飛行教育集団司令部	
27F	足立	浜町	飛行教育集団司令部	
〃	兼山	浜松	2空団輸送補群修理隊	
〃	田立	千葉	東京都足立区4-3-15千寿コーポ205号	
〃	藏田	退蔵	町田市忠生3-14-3セジュール天野Ⅱ-201	
〃	沢田	退蔵	5空団警補群本部	
〃	高木	新田	立川市高松町2-25-28	
〃	西村	退原	資料計画部	
〃	堀野	蛟	空自警戒航空隊整備群本部	
〃	元山	三	「さわかぜ」	
27N	小田	佐世保	潜水艦教育訓練隊	
〃	五十嵐	呉	第1術科学校付中級（船）学生	
〃	文口	江田島	教育航空集団司令部	
〃	中里	下	厚木ブログラム業務隊分遣隊	
〃	益田	厚木	厚木ブログラム業務隊分遣隊	
〃	山田	厚木	調査学校	
28A	鞍地	小平	武器学校研究部	
〃	足立	土浦	第8車教導隊	
〃	岡沢	玖珠	戦車教導隊	
〃	北原	富士	~~第2特科連隊第2大隊2中隊長~~	CGS学生
〃	幸野	~~富士~~	4補中隊	
〃	古賀	防大	横浜市市塚区品濃町553-1 J-1405	
〃	鶴見	退	大阪市市正区鶴町2-16-11	
〃	永井	退蔵	第5普通科連隊本部S-3	
〃	日高	青森	装備開発実験隊車両科装輪車班	
〃	藤原	富士	~~第7特科連隊1大2中~~	特科部観測班
〃	三好	~~千葉~~ 千	幹部学校学生	
〃	矢野	市ヶ谷	アメリカ合衆国留学	
28F	湯浅	千	2空団警備群装備隊	
〃	今井	歳	Peter-Roos-Str.9 4000 Düsseldorf 11 FR Germany	
〃	神山	ド	土浦市右籾3035右籾ハイツA-101	
〃	越水	退蔵	幹部候補生学校	
〃	白水	幸浜	飛行教育集団司令部	
〃	末広	退	愛知県豊田市トヨタ町10東アパート715	
〃	中川	退	世谷区多摩川2-14-13星和荘103	
〃	平島	浜	飛行教育集団司令部	
〃	山田	退		
〃	吉田	退蔵	文京区本駒込2-12-6駒込2丁目団地4435	
28N	米田	退蔵	栃木県宇都宮市緑4-1550-84	
〃	鈴木	退	第1術科学校中級艦艇用兵	
〃	竹本	江田島		
〃	西小路	退蔵		

11万

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
28N	内田　公明	横須賀	横須賀造修所企画室	
〃	河津　稔	八戸	呉監気付「なつぐも」	
29A	浅川　王樹	退職	品川区豊町1－22－1今井荘	
〃	青柳　光	退職	横浜市緑区市ヶ尾町1063-10	
〃	蝦原　良雄	八戸	第9後方支援連隊武器隊	
〃	大川　浩史	前川原	幹部候補生学校第2候補生隊	
〃	小屋敷　秀彦	退職		
〃	駒井　紀美彦	大宮	化学学校教育部	
〃	佐竹　右幾	退職		
〃	坂井　辰也	久里浜	通信学校第1教育部	
〃	新保　博徳	吉井	武器補給処吉井弾薬支処	
〃	託摩　安広	旭川	第2施設大隊	
〃	立林　剛	竹松	第7高射特科群	
〃	津田　芳明	札幌	北部方面総監部防衛部防衛課	
〃	中村　浩之	~~東千歳~~ 下志津	~~第7高射特科連隊第2中隊~~ 高射学校	(48.1)
〃	古田　清悟	函館	第28普通科連隊第3中隊	
〃	古川　靖人	福岡	第4後方支援連隊武器隊	
〃	谷　拓弥	市ヶ谷	調査部別室	
〃	甲斐　正人	郡山	第6特科連隊	
〃	水上　義仁	帯広	第5通信大隊	
29F	熊田原　修	千歳	第2航空団第203飛行隊	
〃	高松　実	小牧	航空救難団整備群	
〃	西村　政恭	春日	第2高群 防衛課	
29N	柏木　均	横須賀	練習艦隊付	
〃	川上　和美	退職		
〃	山崎　浩一	呉	呉監副官	
30A	池永　博和	相模原	東方通信群101基地通信隊	
〃	岩熊　真司	大宮	武器補給処大宮支処技術課	
〃	魚躬　治晴	退職	東京都板橋区高島平2-33-7-318	
〃	魚住　晴康	立川	東方航空隊第1飛行隊	
〃	亀山　淳	守山	名古屋市守山区守山3-12-1	
〃	笠島　広文	退職	鯖江市水落町1丁目4-23	
〃	菅町　俊夫	檜町	檜町業務隊付　東京工業大学	
〃	土屋　甲吉	函館	第343施設中隊	
〃	中井　馨	退職	甲賀郡石部町金ケ町865	
〃	中村　大助	姫路	第3特科連隊第4大隊本管中隊	
〃	中川　洋行	帯広	第1対戦ヘリ隊	
〃	中森　雅美	北宇都宮	東方航空隊第12飛行隊	
〃	西　良典	帯広	第4普通科連隊	
〃	林　宏幸	川内	第8施設大隊	
〃	福田　洋司	伊丹	伊丹業務隊付　神戸大学	
〃	船津　達男	退職		
〃	宮本　善弘	高遊原	西部方面隊第8飛行隊	
〃	矢納　祐二	福岡	第366会計隊	
〃	山口　芳正	遠軽	第25普通科連隊第1中隊	
30F	栗田　向幸	殉職		
〃	里田　健一	退職		
〃	後藤　豊	退職	大阪市生野勝山南1-21-19	
〃	高橋　親敏	小松	第6航空団基地業務隊	
〃	西本　彰雄	~~入間~~ 笠取山	~~中防群防管隊~~ 第1警戒群 運用班長.	
〃	橋爪　猛	新田原	第5航空団	
~~〃~~	~~本田　猛~~	~~退職~~ (なし) ↑同一人物		
〃	吉田　憲司	浜松	第2術科学校第1教育部第4科	
30N	鈴木　達雄	退職	西春日井郡豊川町大字豊場字流川147	
〃	時久　寛司	防大	理工学研究科	
〃	百崎　邦彦	大村	123航空隊	
〃	湯浅　秀樹	船越	プログラム業務隊本部	
31A	石丸　威司	帯広	第5施設大隊本部	
〃	池ノ本　八郎	富士	装備開発実験隊車両様装輪班	
〃	大島　龍一郎	退職	堺市上野芝町8-1-4	
〃	亀山　慎二	防大	第443小隊指導教官	
〃	久保　敏治	北恵庭	第1戦車群第304戦車中隊	
〃	佐野　光	霞目	東北方ヘリ隊	
〃	椎野　健治	八尾	中方ヘリ隊	
〃	田口　直志	上富良野	第305武器直接支援隊長	
〃	辰巳　竜悟	富士	装備開発実験隊電子機器科通信機器班	
〃	辻　政幸	真駒内	第11高射特科大隊	
〃	中川　博英	北熊本	第8後方支援連隊補給隊	
〃	橋本　哲彰	丘珠	北方航空隊第11飛行隊	
〃	久富　博幸	退職		
〃	藤岡　登志樹	滝ヶ原	普通科教育連隊	
〃	松井　健一	防大	防大研究科	

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
31 A	武辰明文	千僧	第3輸送隊後方支援連隊輸送隊	
31 F	部博晶	那覇	航空~~気象~~群 研究部	
〃	村克人	那覇	那覇ヘリコプター空輸隊	
〃	南良彦	那覇		
〃	藤良一	三沢	第3航空団 パイロット 4.4	
〃	沢寛治	防府北	第12飛行団教育集団 ~~3.31~~ 所属	3.
〃	沢隆一	千歳	第2航空団第203飛行隊 パイロット.	
31 N	名伸司	大湊	第41護衛隊「さわゆき」	
〃	田岳史	横須賀	第41護衛隊「うみぎり」	
〃	井一博	館山	第12航空隊	
〃	斐義一	横須賀	練習艦隊「かとり」	
〃	保修	佐世保	第2護衛隊群「らくま」	
〃	田浩一	東京	東京信通隊プロペラ編隊	
32 A	田道文	板橋	第34普通科連隊第2契約班	
〃	来裕啓	旭川	中央会計隊契約班	
〃	塚和治	退職	第2高射特科連隊第1中隊	
〃	塚真也	防大	航空大学校 宮崎市大字赤江字飛江田学生寮	
〃	原益二	海田市	第46普通科連隊迫中隊	
〃	田聡男	八尾	中方ヘリ隊	
〃	山誠一	山口	第17普通科連隊本管中隊	
〃	崎孝明	退職	幸和田町32－4	
〃	工雅彦	退職	和歌山県東牟婦郡古座町中湊531	
〃	保俊昭	退職	世田谷区松原3-23-10フィールドハイツ101	
〃	口芳郎	八尾	中部方面航空隊	
〃	内利治	滝ヶ原	普通科教育連隊第5中隊	
〃	村裕亮	びの米	第24普通科連隊本管中隊	
〃	田雄翼	留原	第4特科戦車連隊第5大隊	
〃	元昌二	馬	第12混成団施設隊	
〃	重毅尚	知	第3航空団司令部	
32 F	地伸一	沢	第6航空団整備補給群装備隊	
〃	村茂己	松	中警団防衛群	
〃	木憲雄	間	航空教育団	
〃	橋秀人	入	第3輸送航空隊	
32 N	口直博	三沢	第34護衛隊「ちくご」	
〃	部誠英	佐世保	調布市若葉町3-9-3YHP価台寮	
〃	上康幸	退職		
〃	藤幸			
〃	本武朝			
〃	尾研志			
33 A	田誠	練馬	第1後方支援連隊武器隊	
〃	津勝	練馬	中央資料隊	
〃	野忠	練馬	防大研究科	
〃	崎英	退職	東京都保谷市ひばりヶ丘3-4-3T&Kひばりヶ丘	
〃	藤哲	東京	第7特科連隊	
〃	山直	退職	第3特科群	
〃	葉博	退職	練馬区高野台5-1-12FGL石神井寮216号	
〃	口喜	留守	第26普通科連隊	
〃	樫勇	防大	第221小隊指導教官	
〃	塚修	東京	第11普通科連隊	
〃	澤新	退職	岐阜市加納南陽町3－12	
〃	永智	退職	岡山県倉敷市大内1073	
〃	野容	退職	第25普通科連隊	
〃	本真	大津	第109教育大隊第316共通教育中隊	
33 F	崎秀	不明		
〃	本勝	不明	第8航空団第6飛行隊	
〃	中俊	城		
〃	木浩	退職		
〃	草友	那覇	南西防空管制群南西航空警戒管制隊	
〃	田広	松	兵庫県西宮市田近野町5-4	
〃	厨直	島	第4航空団教育集団司令部	
〃	澤雄	松	教導高射隊第2教導隊	
33 N	口輝	浜		
〃	橋一	不明	第2術科学校幹部専修科上級英語課程	
〃	窪幸	横須賀	第22支援整備隊	
〃	島一	大村		
〃	本美	不明	教空団司令部学生	
〃	辺一	下関		
〃	里英	不明	練習艦隊	
34 A	原裕	船越	第6飛行隊	
〃	中太	神町	第66後方支援連隊	
〃	丸一	福岡	第1戦車群	
〃	井正	北庭	第37普通科連隊	
〃	田勝	恵山	第43普通科連隊	
〃	田説	信太		
〃	高達	都城		

期別	姓名	基地等	所属部隊等	備考
34A	能井 智治	退職	津山市勝田町19	
〃	松永 康則	新発田	第30普通科連隊	
〃	平林 理	真駒内	第11戦車大隊	
〃	永室 正一郎	退職	福岡市城南区田島4-24-32	
34F	羽田 充伸	浜松	航空教育集団司令部付	
〃	小笠原 卓人	習志野	第1高射群	
〃	河田 成治	浜松	航空教育集団司令部付	
〃	田代 秀也	那覇	南西航空混成団南西航空警戒管制隊	
34N	富山 修	横須賀	練習艦隊司令部	
〃	丹羽 満 良	岩国	第31支援整備隊第311検査隊	
35A	安藤 和幸	霞目	東北方面航空隊	
〃	戒田 重雄	習志野	第1空挺団	
〃	川嶋 和之	北宇都宮	第12飛行隊	
〃	木場 元大	信太山	第37普通科連隊	
〃	坂本 雄一	旭川	第9普通科連隊	
〃	瀬戸口 淳	八戸	第5高射特科群	
〃	中村 健太郎	高田	第2普通科連隊	
〃	中本 尚明	市ヶ谷	第32普通科連隊	
〃	福本 博氏	山口	第17普通科連隊第1中隊	
〃	馬渕 貴史	福島	第11施設群329施設中	
〃	袖之原 公郎	目達原	第4飛行隊	
35F	中澤 武志	浜松	航空教育集団司令部付	
〃	堀 修二郎	防府北	12飛行教育団地上準備教育隊3-B	
35N	加藤 寛和	横須賀	練習艦隊	
〃	中原 俊行	横須賀	練習艦隊	
〃	三浦 則文	横須賀	練習艦隊	
〃	森泉 周	横須賀	練習艦隊	
36A	井上 勝	久里浜	中央野外通信群	
〃	岩村 伝 法	退職		
〃	榎窪 正和	青野原	第8高射特科群	
〃	大北 知史	駒門	第1戦車大隊	
〃	倉田 一	勝田	施設教導隊	
〃	中村 英 昭	遠軽	第3普通科連隊	
〃	日高 邦登	北熊本	第8特科連隊	
〃	福島 浩二	美幌	第1特科群	
〃	藤岡 史生	真駒内	第18普通科連隊	
〃	前田 尚男	久留米	第4特科連隊	
〃	村上 至	真駒内	北部方面輸送隊	
36F	錦森 昭 示	饗庭野	第4高射群	
36N	鳥越 要	江田島	海幹校	

1466

編集後記

合掌

新年、おめでとうございます。
ＯＢの皆様におかれましては、ご健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。また日頃から、貴重な時間を割いてのご協力、ご支援ならびにご指導を承り、誠に有り難うございます。
さて、このたび防衛大学校少林寺拳法部誌第１９号の発刊をむかえ、平成４年度の輝かしい結果をご報告することができ、大きな喜びとするところであります。
我が部も創立２８年目を迎え、諸先輩方の築き上げられてこられた伝統を受け継ぐべく、日々活動しております。
今後とも、現状に甘んじることなく、防衛大学校少林寺拳法部の名をより知らしめるべく、たゆまぬ努力を続けて行きますので、ＯＢ各位におかれましては、何かとご多忙とは存じますが、かわらぬご指導、ご高配をよろしくお願い申し上げます。
最後に、ご指導くださった部長、監督、顧問の方々をはじめ、投稿してくれた各学生に感謝し、編集後記と致します。

結手

平成４年度ＯＢ係

明治記念館

6/4 1630～1900

あけぼのの間 160名

1466 杉本